230.
D29wj

J. Dean Davis
Jerome

The What and the
Why of my Faith

174p.

1 Vol.

Keiseisha

Tokyo

1904

3 0112 106069757

Yoga Shinko no Riyu (1 Vol.) By J. D. Davis, publishe
Keiseisha, 1904. The What and the
of My Faith.

THE WHAT AND THE WHY OF MY FAITH.

By Rev. J. D. DAVIS, D.D.

ゼ、デー、デビス著
日野真澄譯

予の信仰の理由

東京
警醒社書店

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS.
URBANA.

230
D29wJ

予が信仰の理由

ゼー、デー、デビス著

日野眞澄譯

緒言

著者基督教の大眞理を研究すること茲に年あり、世上の人士にして此大眞理中の或部分を疑ひ、或は否定せる者少からざるの時に當り、教室に出で、此等の問題に就き、著者に疑惑の解決を求めたる日本學生の數、實に數百、討究の年を重ぬること既に二十を越ゆ、是の故に著者は己が信仰の基く所を精査するの必要に迫られたり、蓋し此小冊子は著者多年の研究に基き殊に己が心情にて此の眞理を實驗したる所に據

1Y28Cha

637587

UNIVERSITY LIBRARY

り、基督教信仰の基本たる大眞理を言明せんとするにありて敢て此眞理を證明せんと努むるには非ず、唯僅かに己が所信を敍述し、其基く所を明示せんと欲するのみ、

著者はキリストの人格と事業との樞要なる事を感ずること頗る切なるを以て、殊に此題目に就き論述するの必要なるを覺えたり、

著者は聖書に散在せる數個の文句を引照して、己が所信を保持すべき金城鐵壁と爲さず、固より聖書の文辭を引用せりと雖ども、是れ唯聖書全體を通貫せる傾向、若くは潮流の梗概を示さんとするに止まるのみ、

予が信仰の内容と理由との要略

（第一）我は吾が存在するを認識す、『我思ふ故に吾在り』、我は吾が身體と等しからず、吾が身體は寧ろ吾が器械なり、吾が手の痛むは我の痛むに非ず、吾が心臟は他の傷ふ所、痛む所となるも、痛む所となり觸覺せらるべき者は吾に非ず、

（第二）我は外界の存在するを認識す、吾が感官は其然るを直覺せしむ、即ち我之を視又之に觸るればなり、

（第三）我は始めある者、若くは變化ある者には、必ず之が原因たる者無かるべからざるを認識す、

（第四）我は原因は其結果の一、若くは總計よりも大ならざるべからざるを認識す、

如上の公理に基きて自ら起れる我信仰は左の如し

(第一)我は人をも包容せる宇宙間に、萬物の原始的大原因たる者のなかるべからざるを信ず、

其理由(一)吾人の目擊する宇宙には始めなかるべからず、若し物質にして永劫無窮ならずとせば、其創造せられたるや疑ふべからず、而して創造者のなかるべからざるの理も炳乎として明なり、然るに若し物質にして永劫より存在したりとせば是れ永劫の昔より運動し續きたるか、若くは過去に於ける一定の時機に當りて、運動し始めたる者ならざるべからず、

若し過去に於ける一定の時機に當りて、物質始めて運動したりとせば、之を動かしたる原因無かるべからず、

又若し物質にして永恒の昔より運動したりとせば、何故宇宙は幾億

年の昔に於て、既に現今見るが如き發展の程度に達せざりしや、此に由て之を觀れば物的宇宙の運動には始めありたる而已ならず、科學者は等しく此運動の遂に終結せざるべからざる事を明示す、

其理由(二)又予は極微原子の一インチ立方内に、三万京或は三垓即ち一億の三万億倍もあるに、其原子は一として結晶體ならざるなきを觀ば、實に原子なる者の巧妙なる製作に出でたるを想はずんば非ず、加之この原子の結合するや常に一定の比例に依るを知るに至りては、予は此原子の智ある創造者に造られ、又其排置に係れるを信せざるを得ざるなり、

其理由(三)若し諸種の物質勢力、例せば電氣的及び磁石的吸引力引力化學的親和力、生活力等にして嘗て創造者が之を物質中に入れたる事もなく、又は現時間斷なく入るゝ事も微りせば、吾人は物質の意義を解

するに苦しまざるを得ず、

其理由(四)生命は如何にして世界に現はれ始めたるか其說明なかるべからず、此世界には到底生命の存在し能はざりし時ありたるや疑なし、科學者は吾人に告げて曰く生命なき者より生命發生せずと、

其理由(五)然りと雖も假に生命存在したりと讓步するも生命の始めて世に現はれ出づるや、アミバの如き劣等の形式を取れるは明なり、茲に解釋を待たざるべからざる問題は、智、情、意、良心等の巧妙なる諸能力を具備せる人が、如何にして原始的アミバより發達したるかにあり、夫れアミバの中には人類要素の百万分の一だも潜伏せず、然らばアミバ以上の要素は何處より來りたるや、結果は原因より大なるべからず是故に予は人を說明せんと欲せば、勢ひ創造者を假定するの要あるを覺ゆ、

其理由(六)予は世界到る處に意匠、即ち方法の目的に適合する事の眞なるを認む、是れ蓋し偶然の結果に非ず、予は智慮ある創造者を信せざるを得ず、

想ふに進化論は此論勢を弱むる者に非ずして却て頗る之を強むる者なり、何となれば機に臨み變に應じて、或は斷えず或は時を定めて、必要の成分を萬物に加入し、以て目的に適合すべき方法を擇び、能く萬物をして整然亂れざるの秩序を經て、間斷なく向上的に進化せしむるは、一瞬時間内に萬物を創造し畢るよりも、遙に偉大なる創造力と統御力と伎倆とを要すればなり、

其理由(七)予は又宇宙に企圖、秩序、排列等のあるを認む、即ち極微原子の配合するや常に同一の秩序と比例とに準ず、天體の運轉するや規律亂れず進退時あり、其偶然に出でたるに非ざるや明なり、予は之を説明

せんと欲せば創造者を假に設けざるべからず、

其理由(八)人類は種族の異なるを問はず、時代の差あるに論なく、皆等しく宇宙に大原因あるを信ぜり、

其理由(九)予の人格的第一原因を信ずるは、彼の感化力が延びて予の心情に及びたる事を直接意識する所あればなり、

第一原因の存在を信ずるは科學的なり

此故に予は始めありて變化する萬物の偉大なる第一原因、即ち絶對的實在、永遠、自存、獨立者にして萬物の基なる者の存在するを信ず、蓋し結果ならざる永遠の第一原因を假設するに非ずんば、何をも説明すべからざればなり、而して斯の如き第一原因を假設せば、以て萬物を説明するに足れり、故に斯の如き第一原因を信ずるは科學的なりと云ふべし、

第一原因は變化せず

此第一原因は渝ることなし、吾人は其變化すべき理由を見ず、若し此

原因變ずるとせば是れ吾人の要求する完全の者に非ず、

第一原因は唯一個あるのみ

第一原因は唯一あるのみ、宇宙の企圖と秩序とに統一あるは、以て唯一の創造者あるを證明する者なり、彼は理想的に完全ならざるべからず、即ち彼は萬物の完備又原型にして其中には吾人の概念し得べく又可能なる形式、關係、總體、調和等悉く理想に適ひて永遠に具備せざるべからず、

第一原因は人格的靈なり

彼には無限の動力なかるべからず、蓋し彼は萬物の原因なればなり、彼は無限の人格的靈たらざるべからず、蓋し靈を除きて萬物の原因たり得べき者更に之なきを以てなり、彼は我靈よりも偉大ならざるべからず、彼は事物を知り又之をなさんが爲に、在さゞる所なき者たらざるべからず、彼は超越的にして亦內在的なり、有らゆる能力は其身に備はり、能力の對象たる物は一として彼の能くする所に非ざるはなし、彼は

第一原因は道德的人格なり

第一原因は完全なる善なり

過去、現在、未來を通じて萬物を認識す、

彼は完全なる人格、而かも愛に根ざせる人格なり、神の品格に存する愛を日光に譬ふるを得ば、智慧、正義、公正、憐恤等は猶三稜鏡を通じて顯はれたる七色の如し、

此第一原因は善に於て完全なる者たらざるべからず、此世に於ける事物の排列と秩序とは、神の善なるを示す、現世は實に悦樂を完ふするに適へる者にて吾人は體慾を滿たせば快樂之に伴ひ、智能を運用せば意自ら爽快を覺ゆ、吾人は智識を好み之を愛するの念に切なり、而して此願望を滿たしめんが爲には、廣漠の學界あり、吾人には異性、小兒、親戚、朋友、社會を慕ふの愛情あり、而して此愛情に應ずるに異性、小兒、朋友、社會の存するあり、單に之のみならず人各々他の災害を觀て之を憐み、之と情を共にする思の己が心中に植え付けられたるを知る、

良心は神の善あるを証す

人の德性は亦創造者の善なるを證し得て餘あり、蓋し吾人は自ら仁慈なる行動を爲さずして、最高の幸福を完ふせんことは得て望むべからざればなり、吾人が良心は常に善行を嘉みし邪行を譴む、創造者にして善良なるに非ずんば焉んぞ之を能くせんや、

宇宙は神の無限なるを示す

概論すれば此人格的第一原因は人に備はれる屬性を悉く具へ、而して其屬性たるや無限に廣大ならざるべからず夫れ此原因は人よりも小なるべからず、然り彼は完全なる人格ならざるべからず、此人格的原因が數ふべからざる時間內に於て、其智慧と力量とを絶えず使用し以て創造しつゝあるか、若くは發達せしめつゝある宇宙は、實に此無限なる原因を有限的に寫せる者なりと云ふべし、而して人は宇宙の一部に屬す、兎にかく宇宙は實に或度合までは此原因の『像』に類せずんば非ず、翻て人類を觀察するに人皆不幸なる者を憐み、苦しめる者を救助せ

んと欲するの心あらざるは無し、人性中の至高部即ち道德性は此種の行爲を奬勵し、之を悦ぶを當然の理なりと看做す者とす、

至善至愛の神は必ず人を救はんとす

此故に萬物の最大原因なる者は人類を救助し、之と交はらん事を欲するや明かなり、夫れ人類は誘惑の襲ふ所に陷りて己が劣等なる性情の奴隷となり、禍害と不安とを其身に招くに至れり、是に於てか人類の父にして偉大善良なる者が、曾て己の像の如くに造りたる人類を愛顧し、自己を啓示して之を救はんとするは自然の數なりと云はざるべからず、

基督の降臨は預言と約束とに應へり

世界幾多の宗教中にありて殊に基督教は偉大なる第一原因即ち吾人の天父より出でたる者なりと自任す、昔は神親ら人類最初の祖先に現はれ自己を啓示し、其愛と罪より脱するの道とを示せり爾後神は長年月に亘りて救主の來るべき約束と預言とを爲し、又儀式典禮を守ら

しめ以て基督の事業を豫め暗示せり、而して今を去る千九百年の昔に當りて、預言と約束とに應ひて基督は來れり、其來るや自らも云へるが如く、實に舊約儀式の原型として其儀式を完ふせり、予は基督が豫期に違はず神より來れるを發見す、

基督教は世界的なり

世界の宗教は一として國家的、若しくは地方的ならざるはなきに、獨り基督教は世界的なり、神曾て基督に就きアブラハムに約束して、『汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし』と宣へるは實に之に外ならず、その他の宗教は何れも氣息奄々として死に瀕しつゝあれども獨り基督教は勢ひ隆々として驚くべき速力にて全世界に彌漫しつゝあり、基督教は實に文野の如何を問はず凡ての人種、國民、階級に適するを以てフイジー嶋と亞非利加中部との蠻族が、之に依りて文化に進み祝福を受けたるのみならず、現今最も文明に進める國民も亦多くは基督教を

信ずる者なりとす、

救主は神の人と成れる者なり

基督教にありて偉大なる事業家は神なり、神は實に世を愛するの極その子を世に遣はして、之を贖ひ之を救はんとせり、他教の救主は人間にして人の神と成れる者なれども基督教の救主は神にして神の人と成れる者なり、基督は途なり眞なり生命なり、彼は亦活ける救主なり、彼は其靈即ち聖靈によりて己を容るゝ者の心に住み、以て靈的に其心を照らし、又活かし又強め又導く者にて、基督教の人に及ぼす力の大なるも實に此に存す、されば人若し靈によりて万人の父なる神の靈と融合する事あらば、彼忽ち再生して新心、新力、新生命てふ上天の賜物その身に降るを觀るべし、

基督は人類の理想なり

基督は基督教の偉大なる中心にして亦その源泉なり、世界の大哲學者等は彼を以て理想的人物なりと看做せり、シェルリングは基督の降

誕を以て『世界歴史の轉機なり』と云ひ、ヒヒテは『基督は愛の化身なり』と斷言せり、其他彼を呼びて『道德的理想』『人類の理想』『罪なき人の模範』と看做す者あり、熟ら基督の敎訓を考ふるに、世界に於ける最高最純の道德の系統は收めて其中に在りと云ふべし、

基督の天より來りたるは、實に神を人に啓示し、人の途と眞と生命と成り、『多くの人に代りて生命を與へ其贖とならん爲』なりし事は彼自ら云へるが如し、彼訴へらるゝ時に當りても、其罪狀として敵の告發せる所は、唯纔に彼自ら活ける神の子なりと云へりとの事に過ぎず、彼は此數言を述べたるが故に罪せられて磔殺せられたり、

歴史上の證據

飜て基督降誕後、數世紀間の歴史を回顧するに、基督敎は當初甚しき迫害に遭ひ、三百年間羅馬帝國その全力を擧げて之を斃さんと計りたれども、帝國却て基督敎の爲に服せらる、既にして基督敎は亦羅馬帝國

を覆へせる北方の蠻族を平らげ、後暗黒時代に移るに及んで北歐洲及び貌列顛の慓悍蠻族を敎化せり、然りと雖ども年を經るに隨ひ、基督敎の氣力漸く挫け、中世紀に至るに及んで僧侶は儀式を事とし、其腐敗甚だしかりしと雖ども再ひルーテルの改革によりて基督敎は自ら己を潔め、元氣を恢復して地上の萬國万民に福音を宣傳し、かくて現今世界最善の文明と藝術との基を据ゑたり、是れ予が基督敎を以て萬人の父なる者が人類に與へたる宗敎なりとなす所以なり、

聖書は神の啓示を載す

世界に於ける聖經典中、獨り一個の書のみ最古時代より人類に示されたる神の顯現と、基督に就ける神の約束と預言と基督世に降りて人類間に住める事と、彼が愛の事業と其恩寵に充てる言辭と十字架上の死とその甦生と其昇天と保羅を始め其弟子等が福音を傳へ以て二大陸に跨りて基督敎を樹立したる驚くべき事業とを誌せり、而して予が

心を感化し予に活力を與ふるもの、天下何れの書か基督及び其使徒の言に如く者あらんや、且つ思ひ見よ此書今や四百有餘の國語に譯せられたれば、世界廣しと雖ども此書の如く多數の人の熟讀攻究する所と爲れる者あることなし、之を讀む者は個人と國民との別なく、其德上昇して福祉爲めに增進するを常とす、此故に予は此書を以て自稱する所に違はず、神の眞正なる啓示を誌せる者なりと信ず、

基督曾て其弟子に約するに眞理の靈を與へ、以て彼等を全眞理に導き、衆理を敎へて己が彼等に云ひし事を憶ひ起さしむべきを以てす、然るに基督の言辭の記錄されたる者、殊にヨハ子の第四福音書を通讀するに、情意剴切、一言一句恰も我に語るが如く我心を感奮せしむるを以て、予は其載する所概して基督の述べたる所に異ならざるべきを信ず、又保羅、約翰、彼得等の書簡には何れも他書に類例なき靈的香氣と氣力

聖書の記事は歴史的なり

と充ち滿てり、

抑も猶太國の存せる時代は風俗、習慣、法律、通貨等の新陳代謝極めて繁かりしにも拘はらず、新約聖書の此等に就ける記述の頗る正確なるは實に驚かざるべからず、猶太は初めバビロンの管轄に屬し、後ち希臘、羅馬之れを支配せり、而して基督在世の當時は其法律に二樣あり隨て裁判法にも猶太的及び羅馬的の二種ありき、言語に希伯來、アラメック、希臘、羅馬の四あり、通貨に希伯來、希臘、羅馬の三樣の別ありたれども、新約聖書記者は如上の事柄を記述するに當り、普通名詞を棄てゝ固有名稱を用ゐたる時にすら、能くも紛ふことなく是等を正確に記述せり、是れ蓋し後代の人の能くする所にあらざるや明なり、又基督の生涯の要件が誤りなき事は之を新約聖書著作と時を同うせるタセタス、シウトニアス、ジユベエナル、プリニー、トラジヤン、ハドリアン等の編年史に徵

舊約書は進歩的啓示を載す

して之を知るべし、夫れ第二世紀の初に當りては基督教會の教父等は新約書中より往々引用せる所あり、又第二世紀の中頃に至れば西部亞細亞、南部歐羅巴、北部亞弗利加に於ける諸教會は既に新約書中の重要部分を使用しつゝありしなり、

以上の理由及び其他の理由に徴するに、新約書の文書は史的にして信憑するに足る者なりと云ふべし、而して基督の約束したる聖靈は、新約書記者を祐助し之を指導し、以て基督の教へたる貴き眞理を記さしめ、又之を傳播せしめ以て各人の罪より脱離して基督によりて、神と一致するに必要なる靈的眞理を知るに缺くる所なからしめたるを信せざるを得ず、

惟ふに新約書は舊約書の大成したる者なれば、此兩約書中一を缺けば他は全かるべからず、舊約書は新約書の表號にして新約書に至りて

其目的を成就したりと云ふべし、基督は常に舊約書を引用して權威ある神言と見做せり、予は舊約文書は史的にして、神の導きの下にありて神が人に爲せる進歩的啓示を記載せる者なりと信ず、是れ實に聖書の能く完備して各書間に統一あるを説明するに足る者と云ふべし、

予は多年誠實に五書問題を研究したる結果として、曾て「五書問題」と命名せる小冊子に予が意見を述べたりしが、今其理由を略述すれば左の如し、

一、モーゼは歴史的人物にして埃及よりイスラエルの子孫を救ひ出しヱホバより律法と宗教的儀式との啓示に與かれる者なり、

二、モーゼ法典は少くとも五書の基となり其土臺と成れり、

三、五書の大部分はモーゼの筆に成れり、

四、モーゼは斷え間なく引き續きて筆を執らず、又は一枚の羊皮紙に

全部を書せるに非ず、又一時に凡てを誌せるに非ず、彼が遺稿は多かりしが死後蒐めて之を出版せり、

五、創世記の編集者は何人なるや審かならざれども、蓋しモーゼ其人にして古代の文書を參考したる者なるべし、

六、モーゼの死するやヨシュア若くはサムエルの如き人、彼の遺稿を纏めて一となし、必要に應じて或は之を添删し、或は之に說明を施して、モーゼの書てふ一部の卷物と爲せり、

七、此書冊は後世に至りて一度ならず校正せられたるが如し、而して其度每に多少の增補說明之に加入せられたるべし、

八、律法及び儀式は多分モーゼ時代以降增補せられたるべし、

九、惟ふに神は此作用を始終管理したる者にして、初め律法と儀式の基と成れる者をモーゼに示し、後ち彼の書を校正增補せる人々を

聖靈は聖書記者を祐導す

管理し、又祐助せられたり、又如上の作用繼續せる結果として茲に三十九卷より成れる一部の書出でたり、而して此書冊の大勢の向ふ所は、基督と其事業とに存する者にして、救主も此書冊を嘉みして神書神言と看做したりき、蓋し此書と新約書とは啓示せられたる神の意志を載せたれば、實に世の終りまで人類を導くに充分に有効の者なりとす『聖書は皆神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益あり是れ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり』(提摩太後書三章十六節十七節)

基督の教會に約束せられたる聖靈は、爾來等しく基督教徒の心中に活動しつゝあるは、予の確く信ずる所なり、殊に基督教會一般の合意に依りて、聖書の正經（カノン）を確定したる時は、恰も基督教會に對する外部の迫

聖書に無限の趣味あり

害、極めて猛烈なりし際なれば、基督教會は爲めに淸純にして、基督の心に近づきつゝありしを以て、聖靈其衷に在して之を導くこと大なりしは、自然の理なりと云ふべし、

予は聖書を以て進步的書籍なりと認む、夫れ新約聖書は花瓣にして基督は花、書簡と後代の基督教は其の果實なり、聖書の靈的眞理は表號的言語を用ゐて啓示せられたり、神は未知物を初代の人類に啓示するに既知的言語を用ゐ、靈の事を告ぐるに物質的語法を用ゐ、無限物を說くに有限的名稱を用ゐざるべからず、神は人の理解力に應じて、靈的眞理を啓示せざるべからず、故に吾人は此種の表號と、表號的言語とを文字通りに解することあるべからず、何となれば往々表號の陽はに示し得ざる所に、多大の意義否無限の意義すらも隱約せらるゝことあればなり、されば聖書は趣味の豐富なる實に無限なりと云ふべし、其中には

基督は舊約を完成す

深遠にして無際の靈的意義の存するを以て、靈魂の饑飢を滿足せしむるに足る者あり、吾人は數千回の多き同一辭句を反覆讀下するも、其度毎に趣味津々として意義益々深きを覺ゆ、

基督は新舊兩約書の中心的人物にして、彼が人類救濟の大事業は其題目中の最も大なる者なり、夫れ、舊約書と新約書との間には、有機的結合と相互的關係とありて、舊約書は新約書の表號にして又預言なり、基督敎は恰も葉と花と菓とが一粒の種子の中に包藏せらるゝが如くに舊約書の中に伏在す、舊約書は猶蕚の如し、基督以前には久しく密閉せられたりと雖ども、一旦露出して花と成るに至れば、世擧りて之を驚嘆讃美せり、新約書の敎會は舊約書のそれに等しくして、唯僅に後者の潔められ擴張せられ完美せられたる者なるのみ、故に舊約書には基督と其大事業との表號充ち滿てり、

預言者の見界

萬物の進化するは神その衷に内住するに因る

概して昔時の預言者は、預言見界の全面を一時に大觀するを以て、區區たる時間的觀念を念頭に浮べざるを常とす、彼等が將來に就き立言するや、現在に見聞する事柄を用ゐて之を描けるを以て、其將來は恰も光輝燦然たる現時なるが如き姿を呈す、彼等の將來を描くや、能く見慣れたる風景と言辭とを用ゐたり、例令祭司エゼキエルは祭司的語法を操り、羊牧者アモスは田舍風の牧畜的景色を用ゐたり、

既に述べたるが如く人類は神の像の如くに造られたり、然りと雖ども其創造法の如何に就ては、予の揣摩し得ざる所なり、蓋し予は神は所謂る進化により行動するを信ずと雖ども、生命の始めて地上に現はれたる時の如き、或は脊推動物の始めて發生せる時の如き、或は高等性能を具備せる人類の始めて地上に現出したる如きの時に當りては、神の創造的活動は極めて大にして、尋常に非ざりしを示すに足るの證跡、歷

然として明なりと云はざるべからず、然り各時代に神は諸動力と諸能力との裏に內住したるを以て、萬物は絕えず低等の域より高等の域に進步し得たりと云はざる可からず、然るに之に反して神若し萬事に內住して活動することなくんば、此世界は原因よりも絕大なる結果の連續しつゝありてふ奇觀を呈すと云はざるべからず、

物質に於ける强大なる諸勢力を說明するの途は、唯萬物の大原因、大源泉を假定するにあるのみ、夫れ神は此世界の上に超越して其中に包容せられず、然りと雖ども彼は亦內在的なり、吾人が引力、電氣、親和力、收縮力、生活力と稱する諸勢力は、之を譬ふれば猶其本源たる神より流出するが如し、神は萬有によりて呼吸し亦行動す、是故に宇宙到る所に神を顯現せざるはなし、

神は吾人が自然法と稱する一定不變の途に、毫末も違ふことなく、能

く物質界を支配すと雖ども、之と異れる途を取り得ざるに非ず、時としては一見恰も之と相反するが如き方法をすら取るも敢て辭せざる所なり、物質界に於ける彼が統轄は絕對的にして一微分子も未だ曾て神意に反逆せることなし、

然りと雖ども人類の如き道德的存在者には神意に逆ふの力あり、何となれば神は人類に賦與するに人格即ち智、情、意、良心、撰擇の自由等を以てしたればなり、夫れ意志の自由は人格を組成するに與りて最も肝要なる成分たり、若し人に是れ微かりせば彼は人格たり得ざるなり、彼既に自由を有するが故に之を濫用し得る、や固より其所なり、彼若し下等の情慾に誘はるゝ事あらば己が高等の性情の衝動に反し、神意に逆ひて進行することあるも敢て怪むに足らず、蓋し自由性を逆用するてふ事實は偶々以て罪の起原を說明するに足るべし、

正と義務

誰か道徳的存在者にして、正を爲さゞるべからずてふ義務の感想の强力なるを感せざる者あらん、人若し何故に正は正なるかと問ひ道徳的義務の憑據する所如何と尋ねなば、予は己が所信を述べて之に答へん曰はく神の己が道徳性と符節を合するが如く道徳界を組成せるは是れ神の本性の然らしむる所以にして、吾人が神と萬人とに對して善を爲さゞるべからずと感ずるも蓋し之に職由す、而して吾人が義務の範圍は吾人が遂行力の大小如何によりて定まる者にて、凡そ道徳的行爲と云へば理あり智ある者が、道徳的義務の眼前に横はるを観て、隨意に道徳的行動を爲すを云ふ、

良心

吾人は假りに良心を定義して、良心とは道徳的行動中特に正邪を感智する者と爲すを得べし、何が果して正にして何が果して邪なるかは理性、判斷、經驗等相須ちて之を決す、而して良心は何時も渝ることなく、

正の爲すべく邪の避けざるべからざる事を告ぐ、

意志と撰擇力

意志とは心意或は人の能力にして、己が爲さんとする所を決し、又決したる所を遂行する者を云ふ、意志は或る一方面に在りて行動する心意に匹敵す、夫れ人は動機を目的として行動すと雖ども、數多の動機中一を撰びて特に之をして他を壓倒する程強力ならしむるの力は人に存す、動機に對しては萬人は皆な其主君にして、動機を或は強からしめ或は弱からしむ、卽ち彼は己が爲に最強の動機なるべき者を決す、此の如く意志は隨意に撰擇し又其行動を決し得るが故に吾人は之を自由なりと稱す、

神の豫定

神は全智にして凡ての力として備はらざるなければ其道德界を支配するの道は、實に太初より神意中に存せし經綸と合一するや明なり、然りと雖ども豫定に能働的と所働的との二種の別ありて、能働的豫定と

德遂に勝つ

は神が人と共働して人心を感化したるの結果、人々が正當なる撰擇を經て後ち遂行したる行爲にして、能く神意に適ひたる者を云ひ、所働的豫定とは、人類道德性の奬勵する所と神意とに反對して遂行せられたる行動にして、其作用中に神は毫も共働することなく、却て之に抗し之を防禦せんと努むる者を云ふ、神は唯其爲すがまゝに放任するのみ、然りと雖ども全智なる神は、事の必ず此に至るべきを先知するを以て、之に對して臨機應變の設備を爲すや必せり、斯くて終結に至れば罪及び邪惡なる道德的行爲と雖ども、萬人の最高善の爲に用を爲すに至るべし、道德界は此に至りて鞏固安全となり、罪と邪曲とは共に爆裂し去りて、曾て罪より救はれたる人士、若くは新たに造られたる道德的存在者を禍ひすることなかるべし、

神は其道德的王國を支配するに動機と愛とを以てす、想ふに此種の

道德的動機は、遂に神の宇宙内に頗る優勢となりて、救はるべき人々は悉く救はるゝの時來るべし、而して殘れる者が他を罪に導かんとするも、之を果たすに必要なる力は絶無となるの時機來るが如し、(哥林多前書十五章自二十四節至二十八節)

罪の本質

人性と神言の敎訓とを熟考するに、罪は神意に背戾して神より分離するにあり、之を人の方面より觀察すれば慾、若くは利己にして、實に己を他と關係せしめずして專ら之を愛するにあるを以て、神と人とに對する愛の全然缺けたる者なりと云ふべし、

罪の結果

罪の結ぶ所の果は種々の形に現はる、例せば(第一)貪婪即ち自己を滿足せしめんが爲めに權力を穫んとすること、其發作として或は金錢を欲し、或は學藝に耽り、或は壓制を樂しみ、或は多妻を弄するに至る、(第二)驕傲、其誇る所は或は財産、或は階級、或は職務上の地位、或は智力の俊秀

なること、或は智識の該博なること、或は靈的に卓越なることにあり、而して之に伴ふは嫉妬なりとす、(第三)不義若くは他人の權利を重んぜさること、(第四)は憎惡にして忿怒、復讐、遺恨、嫉妬、惡意、惡心、暴虐、善を嫌ひ神を惡む事等皆之に包括せらる、(第五)罪に伴ふ自然の結果たる癡戲と不節制、(第六)爭鬪及び心靈上の不安、(第七)奴隷制度、(第八)僞證、懶眠、(第九)心靈が鈍暗となりて遂に靈的盲目に墮ること、(第十)僞善即ち實際よりも大なるが如く現はさんことを冀ふこと、(第十一)心情の頑迷なること、(第十二)悲慘の狀態即ち良心の譴責烈しく爲に親ら良心と戰ふのみならず、亦神及び事物の本性と鬪ふの必要に迫らるゝに及んで悲慘の狀態轉た痛酸を極むること、(第十三)人若し罪を犯して改むることなくんば遂に自暴自棄に陷り、聖靈に抗して戰を挑むに至る此に至りて品格も固定して永遠渝ることなし、(馬太傳十二章三十一節及び三十二節を參看

神の罪を禁止せざる理由

せよ）

罪とは道徳的存在者が自ら義務なりと覺知する所に反して隨意に遂行せる行爲なり、其由來する所は人格性の特徴たる道徳的自由を逆用するに基く者とす、

神が罪を防止せざる所以は若し之を防止せば人格性をして最も價値尊からしむる成分、即ち自由性を滅ぼすに至るを以てなり、故に神は罪を防止するの極めて無謀の妄擧なるを知る、彼罪を防止せずと雖ども全力、全智、聖愛を盡して罪を制抑し、罪人を救はんと奮勵す、之を要するに舊約時代に於ける神の出現も、古代の預言者の說ける所も、神子を賜へる事も、基督の敎訓も、其生涯と死も、結局目的とする所は實に人を罪より救はんとするにあり、

既に述べたる如く基督は聖書の中心にして、彼が人類に對する事業

は、新舊兩約書の中心的題目なり、

基督の人性

熟ら吾人々類間に降り來れる基督に就ける記錄を見るにキリストの品格は大に嘆賞すべしと雖ども、彼も亦嬰兒として婦女子より產れ、小兒の時期を經、長じて人と成れり、則ち尋常人の如く饑ゑ又渴き、又疲勞を覺え又睡眠を爲せり、彼か感情、情慾等は正しく普通人と異なる所なく、其智力の運用に於ても人と差あるを見ず、彼亦尋常人の如く涕泣したる事あり、心中悲哀に充ち痛く憂慮し、遂に氣絶えて人の如く死せり、彼自らも己を人の子と稱せること殆んど八十四回の多きに達せり、

基督は人間以上なり

基督は人なりき、然り完全なる人なりき、敢て問はん、彼は人間以上ならざりしか、彼の生るゝや天樂を奏して之を迎へたるの祥瑞あり、（路加傳二章十四節）彼は貧窮なる大工の家に長じ學校教育を受くるの機を得ざりしと雖ども、齡十二に達せる頃はエルサレム宮殿にありて學者

と問答し、穎智彼等を駭かしたりと云ふ、(路加傳二章四十六節より四十八節まで)、彼バプテスマを受けたる時、天開け神の靈鴿の如く降りて彼の上に臨めり又天より聲ありて『此は我が心に適ふ我が愛子なり』と云へり、(馬太傳三章十七節)、彼バプテスマを受けて後ち聖靈に充たされ、四十日間食を忘れ、三種の試惑に遭ひたるの時に當り、恰も矢筒より矢の飛ぶが如く速に神言を使用して惡魔を説破し、之を背後に卻ぞけ以て試惑に勝ちたるに、天使來りて彼に事へたり(馬太傳四章十一節)、彼が傳道を開始せんとするの時、ナタナエルに遭ひ直に其心中を洞觀して語りたる神秘の言は到底人間の業に非ず(約翰傳一章四十八節より五十一節まで)、イエス亦ニコデモに告ぐるに自ら天より降れる無類無二の人にして、昔野にありて蛇の擧げられし如く自らも擧げらるべきを以てし、又己を信ずる者は永生を得べしと説けり(約翰傳三章十三節よ

基督の行動はその人間以上なるを示す

り十五節まで）、

基督は又嚴然として敎ふるに人々其靈魂を己に托するは永生の基にして、己を棄つるは永遠の死を來す原因なるを以てす『凡て之れを信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが爲なり……彼を信ずる者は審判れず信ぜざる者は既に審判れたり蓋は神の生み給へる獨子の名を信ぜざるに因る……子を信ずる者は窮なき生命を得、子に從はざる者は生命を見ることを得じ、且神の怒その上に留らん』（約翰傳三章十五節、十八節、三十六節、同五章二十四節、六章三十五節、四十節、七章三十八節、十一章二十五節、二十六節、十二章四十四節、四十六節）

イエス旅行の疲倦にて饑渴を覺え、井の傍に憩へる時サマリヤの一婦に、自ら活ける水を給與し得べきを告げ、其水を飲む者は『渴く事なく我が與ふる水は其中にて泉となり湧き出で永生に至るべし』と明言

す(約翰傳四章十節より十四節まで)、飄て少壯なる一木匠が安息日に、ナザレの會堂に入りて預言者以賽亞より絶妙の文辭を引用し、之を朗讀し畢りて後會衆に『此錄されたる事は今日爾等の前に應れり』と告げたるを見よ、(路加傳四章十六節より二十二節まで)、イエス羊牛を殿より驅逐し、兌銀する者の案を倒し之を叱咤して曰く、『此物を取りて往け我父の室を貿易の家とする勿れ』と、猶太人は之を見て駭き、『爾是等の事を爲すからには我儕に何の休徵を示すや』と詰問せるに、イエス應へて『爾曹此殿を毀て我三日にて之を建てん』と云へり(約翰傳二章十三節より二十二節まで)、

イエスの自ら主張する所に據れば、彼には父なる神と齊しく働くの能力ありて、彼は父の如く自ら生命を有てる者なり、彼は又父と同等の榮譽を受くべき權ありと云へるにより、猶太人之を以て冒瀆の大罪を

犯せる者にて正に死に當ると斷じたりき（約翰傳五章十七節より二十九節まで）、彼は又自ら安息日の主なりと云へり（馬太傳十二章八節）

基督は自ら宣べたる所を重んずること頗る大にして、己が說敎に傾聽せざりし市邑に警告するに、審判の日到らば其受くべき禍はソドムとゴモラにも讓らざるべきを以てす（馬太傳十章十五節）、カペナウンは基督を宿すの榮を得たるを以て天にまで擧げられたりと基督自ら云ふを憚らず（馬太傳十一章二十節より二十四節まで）、基督又曰く父の外に子を識るものなく、亦子及び子の顯はす所の者の外に父を識る者無しと（馬太傳十一章二十七節）、彼又神に非ずんば敢て爲すべからざる約束を爲して曰く『凡て勞れたる者亦重きを負へる者は我に來れ我爾曹を息ません』と（馬太傳十一章二十八節）、基督は又自ら罪を赦すの大權ありと做したるを以て、猶太人之を觀て是れ褻瀆の甚だしき者なりと斷

じ、『神に非ずして誰か罪を赦すことを得ん』と絶叫せり（馬太傳九章二節三節）、彼曰く『我よりも父母を愛む者は我に協はざる者なり我よりも子女を愛む者は我に協はざる者なり』と（馬太傳十章三十七節三十八節）、又彼が『凡そ人の前に我を識ると云はん者を我も亦我父の前に識ると云はん』と明言せる（馬太傳十章三十二節）は、彼が如何に重く自己を鑑定したるかを示すに足る、

基督は自ら神の子と稱し神を己が父と呼べり、而して猶太人は之を目して、神と己とを齊しくせる褻瀆なりと解せり（約翰傳五章十七節十八節十章三十節より三十三節まで）、彼自ら王と稱し己が王國は此世の國に非ずと明言す（約翰傳十八章三十六節三十七節）、サドカイ人が甦生問題にて基督を係蹄に陷れんとしたる時に、彼の答へたる自言に徴するに基督は靈界の秘密に通じたるや明なり（馬太傳二十二章三十節）

基督は自ら天より降れる眞正のパンにして、世に生命を與ふる者なりと稱し、又自ら生命のパンなるを以て、彼に來る者は饑うることなく、彼を信ずる者は恒に渴くことなしと斷言せり、即ち曰く『我は天より降りし生けるパンなり若し人此パンを食はゞ窮なく生くべし』と、又曰く『我肉を食ひ我血を飲む者は永生あり我末の日に之を甦らすべし』と(約翰傳六章三十二節より三十五節まで、五十一節、五十四節)、彼又民衆に問うて曰く、『若し人の子の故の處に昇るを見ば如何』と(約翰傳六章六十節)

ペテロが自己の所信を告白して、耶蘇はキリスト福なる者の子なりと云へる時、彼はペテロを咎めざるのみか、却て之を褒め、『爾は福なり天に在す吾父之を爾に示せるなり』とまで云ひ、更に進んで己が神性を備へりてふ此大眞理の上に築かれたる教會は、陰府の門に敗るゝ事なか

るべしと告ぐ、(馬太傳十六章十五節より十八節まで)、基督は二三人彼の名によりて集まる所には彼も其中にあるべきを約束し、又世の終りまで彼を信ずる者と共に在すべきを約せり(馬太傳十八章二十節二十八章二十節)

節筵の終の日に基督群衆に呼はり云ひけるは『人若し渇かば我に來りて飮め』と、彼更に言を加へて彼を信ずる者は活ける水川の如くに流れ出づべしと約束せり(約翰傳七章三十七節三十八節)、彼又猶太人に告げて曰く『アブラハムは我日を見んことを喜び且つ之を見て樂めり……

……我はアブラハムの有らざりし先より在る者なり』と、而して猶太人は之を聽きて褻瀆と爲し、石を取り基督を撃たんとせり(約翰傳八章五十六節より五十九節まで)

基督曰く『我は羊の門なり凡そ我より先に來りし者は竊賊なり强盜

なり…………人若し我より牢に入らば救はるべし』と、又曰く『我は羊の爲めに命を捐つ…………我之を捐つるの權能あり復た之を得るの權能あり』と(約翰傳十章七節より十八節まで)、彼は己に從ふ者に永生を賜ふの權能あるを主張し、何人と雖ども之を彼の手より奪ふ者なしと述ぶ、彼又父と己とは同一なりと云ふや、猶太人は『爾唯褻瀆すことを云ひ且つ爾人なるに己を神となすに因てなり』と叫びつゝ基督を石にて撃たんとせり(約翰傳十章二十七節より三十三節まで)

彼マルタに曰ひけるは『我は復生なり生命なり我を信ずる者は永遠も死ることなし爾之を信ずるや』とマルタ對へて曰ひけるは『主よ然り我爾は世に臨るべき基督神の子なりと信ず』と、而してイエス之を譴めざりき(約翰傳十一章二十五節より二十七節まで)

基督が己を卑うして此地上に存在しける頃は、彼は世の終りの日と

時とを知らずと明言せりと雖ども、彼は之を知る者は唯神のみなりとの事を知れり、(馬可傳十三章三十二節)彼又自ら十字架上に不名譽の死を遂げたらんには、萬民を引きて彼に就らすべしと揚言せり(約翰傳十二章三十二節)

基督は世の終りに權力と大なる榮光とを以て榮光の玉座に坐し、聖き天使を率ゐて再び來り、萬民を其前に集めて之を審判すべきを告げ、又萬民の永遠の運命を定むる標準は、一に彼等が地上にありて基督を待遇せる愛心の厚薄の度如何に由ると宣言せり、(馬太傳十六章二十七節、二十四章三十節、二十五章三十一節)、彼は又屢々自ら賣られ苦楚、艱難、審判、磔刑、死を經て第三日に甦生すべきを告げたりき、(馬太傳十六章二十一節より二十八節まで、十七章二十二節二十三節、二十章十七節より十九節まで、十二章四十節)

基督はヱルサレムが己を排斥したるを見て慟哭し、其滅亡近きにあるを豫告す（路加傳十九章四十一節四十二節）、彼亦具さにヱルサレム城圍まれ、市民大に苦しむべきを告げて曰く、『其時大なる患難あり此の如き患は世の始めより今に至るまで有らざりき又後にも有らじ』と（馬太傳二十四章二十一節）、ヨセフアスは親らヱルサレム城の圍まれたるを目擊したる者なるが、其悲劇を描くに當りて殆んど基督の用ゐたる語かと思はしむる許りの語を使用せり、（猶太人戰爭記を看よ）、彼は自らユダに賣らるべきを豫告せり、而して彼の堂々たる威嚴の態は、能く『その人生れざりしならば反て幸なりしならん』（馬太傳二十六章二十四節）と宣言せる時に躍如として現はる、

　基督は敢てモーセの誡を變更したるのみならず、更に之に加ふるに一層深遠にして靈的なる意義を以てし、遂に自ら新たなる誡（約翰傳十

三章三十四節)を與へて、彼に從ふものゝ互に相愛すべきを告げ、彼の弟子たる者はキリストが其弟子を愛しける所を以て愛の標準と爲すべしと諭せり、使徒保羅又曰く『我が基督に倣ふが如く爾等我に倣ふべし』と(哥林多前書十一章一節)、基督は明かに自己を以て絶對的模範と爲せり、

基督は民衆を敎ふるに譬喩を以てせり、例せば馬太傳十三章、路加傳十五章、十六章、約翰傳十章、十五章の如き即ち是なり、此譬喩の中には深遠なる實行的、靈的眞理潛めるを以て萬民、萬世を通じて何人と雖ども之を研究して、深奧にして驚くべきの意義あるを發見せざることなし、吾人は約翰傳十三章より十七章に至るまでを通讀して、基督が辭世の前夜懇に其門弟子に宣べたる訣別の辭と祈禱とを知り感慨之を久うす、又其言實に人の宣べ得ざる類の者なるを知る、又基督は自ら父と同

一の品位を有するに非ざるよりは到底能くすべからざる權力の其身に備はれる事と、人々の彼に對する關係は亦彼が其父に對する關係と擇ぶ所あるべからざる事とを斷言して憚る色なし『吾父にをり父我に在る』『爾等すべて我名に託りて求ふ所のことは我之を行はん』『若し人吾を愛せば我言を守らん且わが父は之を愛せん我儕來りて彼と偕に住むべし』(約翰傳十四章二十三節)、キリスト又己を葡萄樹に譬へて曰く『凡そ生命あらんことを冀ふ者は皆我と偕に住まざるべからず人若し我に連らざれば實を結ぶこと能はず』(約翰傳十五章五節)、キリストには聖靈を遣はす權威あり(約翰傳十五章二十六節十六章七節)

基督は自ら父と同一の榮譽、權力、特權を有する事を主張す、『是れ凡ての人をして父を敬ふ如く子をも敬はしめんが爲なり』(約翰傳五章二十三節)『我を見し者は父を見しなり』(約翰傳十四章九節)『我父より出で、

世に臨れり復世を離れて父に往かん』（約翰傳十六章二十八節）吾人は約翰傳第十七章に載せたるキリストの祈禱を傾聽せば、吾人は天闢けて父と子とが永遠より一體なるの樣、眼前に現はれ出づるが如きを覺ゆ、（約翰傳十七章五節、二十一節より二十四節まで）

キリストの猶太サンヘドリム（國會の類）に立ちて自ら神の子なることを明言するや、有司之を以て冒瀆なりと爲し彼を死刑に處す、（馬太傳二十六章六十三節より六十六節まで）、彼十字架上に苦痛激甚なるの頃、呼んで曰く『父よ彼等を赦し給へ其爲すところを知らざるが故なり』と（路可傳二十三章三十四節）、彼己れの側に懸けられたる盜賊の悔改めたるを見て之に向て曰く『今日爾は我と偕に樂園に在るべし』と（路可傳二十三章四十三節）

吾人は更にキリストの甦生後、彼が自ら言へる所殊に彼が自ら天の

うち地の上の凡ての權を有したりと云ひて、其弟子に命ずるに萬民に行きて之を其弟子と爲すべきを以てしたる非凡の事を述ぶるを得べし、彼は洗禮の定式には己が名を父と聖靈とのそれと對等の位に置きたり、而して彼が最後に述べたる語は自ら世の末まで其弟子と偕に在ることとなりき、

父はキリストを己が子と呼び(馬太傳三章十七節同十七章五節)、天使ガブリエルはキリストの生るゝに先ち之を神の子と呼べり(路可傳一章三十五節)、人に憑きたる鬼もキリストの弟子も未だ知らざるに、既にイエスの超人的品位を觀破し、彼の前に跪きて之を拜し、之を神の子と呼び尋ぬるに時未だ至らざるに鬼を責めんとて來れるやを以てす(馬太傳八章二十八節より三十四節まで馬可傳五章七節路加傳四章四十一節同八章二十八節)、船中の人々も亦キリストを神の子と呼べり(馬太

傳十四章三十三節)、マリヤも(約翰傳十一章二十七節)、ペテロも(馬太傳十六章十六節)、トマスも(約翰傳二十章二十八節)、亦斯く云へり、而してキリストは單に此稱號を斥けざりし而已ならず、實に之を容れ剩へ自己を呼ぶに此稱號を以てしたる者を褒め、更に進んで自ら此尊稱を受くるの權ある事を主張し、遂に之を敢て爲したるが故に死刑に處せられたり、

人類の禮拜を受くるに足るべき者は獨り神あるのみ、使徒と雖も人若し之を禮拜せんとするあれば之を拒み、(使徒行傳十章二十五節二十六節、同十四章十一節より十八節まで)、天使と雖ども之を受くるを肯ぜざるに(默示錄十九章十節同二十二章八節九節)、キリストは此の如き神的尊稱と禮拜とを享けて之を拒みたる事なし、(馬太傳八章二節、九章十八節、十四章三十三節、十五章二十五節、二十章二十節、二十八章九節十七

節、馬可傳五章六節、路加傳二十四章五十二節、約翰傳九章三十八節）、以上十回の場合に於てはキリストは自ら神と等しく禮拜せられたれども之を斥けざりき、茲に用ゐられたる希臘語 προσκυνέω は神を禮拜する時に當りて常に慣用せらるゝ者なり、

キリストは神的屬性を己に屬する者と看做せり、例せば全能（馬太傳十一章二十八節、二十八章十八節、五章十七節十八節）、永遠又は生前存在（約翰傳六章六十二節、八章四十二節より五十八節まで、十三章三節、十六章二十八節、十七章五節、二十四節、六章三十三節三十八節五十一節五十八節六十二節、八章二十三節三十八節四十二節五十八節、十六章二十八節）以上は明かにキリストの生前存在を示す者なり、即ち曾て神と偕に在りて後ち天より降りし我は、實に今話しつゝある我と同一人格なりとの意を含む、（約翰傳三章十三、三十一、三十二等の諸節に於て天より降

りたる人の子とは、即はち對話しつゝある自己を指す者にて、既に引用せる餘他の文辭に於ても亦之に等し、キリストは自ら全智なりと稱す(約翰傳三章十三節、馬太傳十八章二十節、二十八章二十節)彼は又神的榮譽と職能と品格とを要求す(約翰傳五章二十三節を看よ)、其榮譽とは父の榮譽と同一なり彼は罪を赦し(馬太傳九章二節七節)聖靈を遣はし(約翰傳十六章七節)、自ら父と一なりと主張して憚らず(約翰傳十章三十節)

キリストは人の己を神と呼ぶを許せり(馬太傳十四章三十三節、馬可傳三章十一節、馬可傳五章六節七節、路加傳四章四十一節)、約翰傳一章四十九節にてはキリストはナタナエルが己を神の子と呼べるを讃し、馬太傳十六章十五節より十八節までに於てはキリストはペテロが己をキリスト活ける神の子なりと呼べるにより之を祝せり、約翰傳三章十六節より十八節までに於てはキリストは己を呼びて神の生み給へる

獨子なりと云へり、約翰傳五章二十三節にはキリストは己を父の子と呼び、父と等しく尊敬せらるべき者と看做せり、約翰傳十章二十八節より三十節までにては、キリストは吾人に告ぐるに自ら永生を有する者にて何人と雖ども己が羊を其手より奪ふ者なしと云ふ、蓋し父は萬有よりも大なればなり、彼更に進んで曰はく我と父とは一なりと、猶太人は以上の言を以て冒瀆なりとし、屢々イエスを殺さんと謀れり、約翰傳十四章六節より十一節までに於て、キリストは吾儕に告げて彼を見し者は父を見しなりと云へり、新約聖書中キリストを神の子と呼べる所實に五十を超え、神を以て己の父即ち我儕の父と云はずして我父と呼べる所應に四十以上を越ゆ、

既に云へるが如くキリストは自ら神の子なりと告白せるを以て死刑に處せられたり、是れ四福音書の異口同音に述ぶる所なり、想ふにキ

新約書と初代教會とは基督を人間以上と做せり

リストは詐僞者なるか將た神性を帶べるか、二者其一に居らざるべからず、而して彼自ら敎へたる中心原理、即ち自己の神性を主張せるが爲めに甘んじて死に就けるを觀れば、他に何等の證據なしとするも、此一事は以て彼が詐僞者に非ざるを示すに足る、蓋し詐僞者にして未だ曾て己が立言を主張せんが爲めに、己が生命を賭せる者あるを聞かざればなり、

新約聖書と初代基督敎會の文書とを通讀する者は、使徒も初代敎會も共に基督の神性を信じ、亦敎へたるを見るべし、今多くの中よりして數箇の例を引用すれば左の如し、

これ神の子イエス、キリストの福音の始なり(馬可傳一章一節)、太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり此道は太初に神と偕にありき萬物之に由りて造らる造られたる者に一として之に由らで造られ

しは無し(約翰傳一章自一節至三節)、夫れ道肉體と成りて我儕の間に寄れり我儕その榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てりヨハネ之が證を作て呼び云ひけるは我先に我に後れ來らん者は我より優れる者なり蓋は我より先に在し者なればなりと言ひしは此人なり我儕みな彼に充滿たる其中より受て恩寵に恩寵を加へらる、律法はモーセに由て傳はり恩寵と眞理はイエス、キリストに由りて來れり未だ神を見し人あらず唯うみ給へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せり(約翰傳一章十四節より十八節まで)

故に爾曹自ら愼み且つ爾曹が聖靈に立てられて監督となれる其全群を愼み主の己が血をもて買給ひし所の敎會を牧ふべし(使徒行傳二十章二十八節)

聖善の靈性に由れば甦りし事によりて明かに神の子たる事顯れた

り（羅馬書一章四節）

そは活す靈の法はイエス、キリストに由りて罪と死の法より我を釋せばなりそれ律法は肉に由りて荏弱その能はざる所を神は爲し給へり即ち己の子を罪の肉の狀となして罪の爲めに遣はし肉に於て罪を罰しぬ…………己の子を惜ずして我儕衆ての爲めに之を付せる者は豈彼に併て萬物をも我儕に賜はざらんや…………罪を定むる者は誰ぞや死て復た甦へり神の右にありて我儕の爲めに禱告し給ふキリストなる乎（羅馬書八章二、三、三十二、三十四節）

人よりに非ず又人に由らずイエス、キリストと彼を死より甦らし、父なる神に由て立てられたる使徒パウロ…………我儕にもせよ天よりの使者にもせよ若し我儕が曾て爾曹に傳へし所に逆ふ福音を爾曹に傳る者は詛るべし（加拉太書一章一、八節）

然れども期既に至るに及びて神その子を遣はし給へり彼は女より生れ律法の下に生れたり……且つ爾曹既に子たる事を得しが故に神その子の靈を爾曹の心に遣はしアバ父と呼ばしむ（加拉太書四章四、六節）

敎會は彼の身體なり萬物を以て萬物に滿たしむる者の滿てる所なり（以弗所書一章二十三節）

已に上に昇れりと謂へば先づ地の下に降りしに非ずや降りし者は即ち諸の天の上に昇りし者なり彼萬物に滿んとす（以弗所書四章九、十節）

彼は萬物を己に服はせうる能に由て我儕が卑き體を化て其榮光の體に象らしむべし（腓立比書三章二十一節）

我心を勞するは彼等が心愛に因て一になり疑を懷かざる全く穎悟

の富を得かつ父なる神とキリストの奥義を知りて安慰を得んことを欲する也智慧と智識の蓄積は一切キリストに藏れあるなり……それ神の充ち足る德は悉く形體をなしてキリストに住めり(哥羅西書二章二、三、九節)

願くは神即ち我儕の父自ら我儕の主イエス、キリストと偕に我儕を導きて爾曹に至らしめ給はんことを(帖撒羅尼迦前書三章十一節)

願くは我儕の主イエスキリスト及び我儕の父の神即ち我儕を愛し且つ恩によりて永遠の安慰と善望を予る者爾曹の心を慰め凡ての善行と善言に爾曹を堅固せんことを(帖撒羅尼迦後書二章十六節十七節)

望む所の福と大なる神即ち我儕の救主イエス、キリストの榮の顯はれん事を望み待たしむキリスト我儕の爲めに己の身を舍て給へり是れ我儕を諸の罪より贖ひ出し且つ己の爲めに一民を潔め之をして熱

心に善事を行はじめん爲めなり(提多書二章十三節十四節)

彼は神の榮の光輝その質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持ち我儕の罪の淨をなして上天に在す榮光の右に坐しぬ(希伯來書一章三節)

神は其生み給へる獨子を世に遣はし我儕をして彼に由りて生を得しむ是に於て神の愛我儕に顯はれたり(約翰第一書四章九節)

誰か能く世に勝たんイエスを神の子と信ずる者に非ずや……また神の子既に來り我儕が眞理者を識るの智慧を我儕に賜ふを知る我儕眞理者にあり即ち其子イエス、キリストに在り彼は即ち眞神また永生なり(約翰第一書五章五節二十節)

爾曹は實と愛とに居りて神即ち父および父の子イエス、キリストより恩寵と慈悲と平康とを受くべし(約翰第二書三節)

天使生命の水の河を我に示せり其水澄徹りて水晶の如し神と羔の寶座より出づ………重て呪詛あることなし神と羔の寶座そこに在り其僕之に事へん(默示錄二十二章一、三節)

使徒等はキリストより力を受けて萬事を遂行せり(腓立比書四章十三節)彼等が心はキリストに粘着せり(使徒行傳十一章二十三節)彼等はキリストと交際を結べり(哥林多前書一章九節、約翰第一書一章三節)彼等はキリストを信じ之を賴めり(以弗所書一章十二、十三節)彼等はキリストを獲たり(腓立比書三章九節)彼等はキリストの爲めには凡ての者を損とせり(腓立比書三章七、八節)キリストは彼等の生命にして(加拉太書二章二十節、哥羅西書三章四節)亦榮なりき(哥林多前書一章三十一節、同後書十章十七節)然り彼等の衷にはキリスト親ら住みたりき、彼等はキリストに從ひ之を愛し之に事へ、キリストの爲めに生活したりしな

り、

紀元後百十年に當りプリニーが羅馬皇帝に奉れる書中に、基督教徒が一定の日を撰びて、日の出づるに先だち互に會合し、基督を神と看做して之に讃美歌を謳ふを常とせりと云へり、第四世紀に當りユーセビアス云へらく『初代より信徒の作れる所と爲れる詩篇と兄弟等の讃美歌とは、キリストと神言とを讃し彼に神性を屬せしめたり』と、

吾人はキリストの爲せる驚くべき事業を載せたる言行錄を通讀するに、實に同樣の感に打たれざるを得ず、例せば彼一たび言を放ち或は手を觸るゝ事あるによりて多くの人を癒せり、即ち盲者は視、啞者は言ひ、癩病人は潔まり、中風に罹れる者と虛弱なる者とは體力舊に復し、熱病にて死に瀕せる者は一言の下に癒され、死せるものすら蘇生したり、數千の群衆も少量のパンと魚とにて養はれたり、加之キリストは自

基督の生涯に伴へる奇蹟、休徵

然界を支配するの力を有したりき、彼はガリラヤ湖上を徒歩し、怒濤を一言の下に靜めたり、彼がガリラヤのカナにて水を眺むれば、水忽ち赤面して葡萄酒と變せり、彼はペテロに命じて海中の魚より貨幣を求めしめ之を貢に用ゐたり、彼無花果樹に嚴命を傳へけるに無花果樹立刻に枯れたり、彼己が弟子に賣られて敵の大衆劍と棒とを携へてゲッセマネ園外に來るに逢ふや、彼が威風と『我は其なり』と云ひたる一言とは敵をして退きて地に仆れしめたり(約翰傳十八章六節)

キリストは人なりき然れども無雙絶倫にして殆んど解釋に苦しむ人なりと云はざるべからず、彼の誕生や實に奇跡的にして、天使ガブリエルもその然るべきを豫告せり、彼の生るゝや天使樂を奏して之を歡迎せり、又天より聲ありて屢々彼を神の子なりと宣揚せり(馬太傳三章十七節、十八章五節、約翰傳十二章二十八節)、彼は疲れ饑ゑ渴きて井の傍

に坐せり、然りと雖ども飲む者をして渴く事を知らざらしむる水を人人に與ふる力を自ら持てるを意識せり（約翰傳四章六節より十四節まで）、彼は甘んじて其身を敵の手に交付せりと雖ども、若し一言を放てば直ちに一團の天軍現はれて彼を護衛すべきを知れり（馬太傳二十六章五十三節）、彼が顏貌は敢て常人に異なる所なかりしが如しと雖ども、時としては容貌激變して天光輝きたるを以て、之を視たる者大に愕きたりき（馬太傳十七章一節より二十一節まで）、彼の祈るや人類の敢て云ふべからざる語を用ゐたりき（約翰傳十七章）、

キリストのゲッセマネ園に於ける悲痛は實に人間以上の苦痛なりしが如し、而して彼が十字架上に磔せらるゝや天地暗黑にして喪するが如し、加ふるに地震ひ墓毀れ聖殿の幔裂けたり、是れイエスが處刑の尋常ならざるを示す者に非ずや、又空虚なる墓側に天使の現はれたる

神性説は萬事を説明す

事、イエスの甦生して其弟子に現はれたる事、彼が弟子の眼前にて昇天したる事等は、皆イエスが神的人格を備へたるを示す者なりと云ふべし、

吾人は如何なる説を用ひて如上の事柄を説明せんとするか、若しキリストをして唯一個の人なるに止まらしめば、聖書も基督教の起原も基督教の勢力も其進歩も其成功も皆不可思議にして其奇蹟の大なる、遙に神の子が降世して苦しめる人類を救はんとするに優れり、

己に像どりて人類を創造せる愛の神が、人類を救助せんとて此世に降り、人類を救助し之に生命を與へんが爲に人と成りたりとて何の怪む事か之あらん、吾人は寧ろ神が此世に降りて人類を救助する事微りせば、却て之を怪むべきに非ずや、

吾人はキリストの此世に來るべき約束が、人類の始祖と結ばれたる

後、數千年の久しきに亘りて同一の約束反覆せられたるを讀み、而して如上の約束に應へて彼れ自ら神より遣はされたりと稱し、自ら神なりと云ひたるの故を以て、死刑に處せられたる人あるを觀、而して此人が基礎となりて己が名を帶べる世界の大宗教、而かも古今未曾有の最も完全なる眞理系統の創設せられたるを知り、又此眞理系統は基督の敵及びキリストの神性を認めざる者と雖ども、有らゆる系統中最も偉大なりと許さゞるを得ざれば人皆擧りてキリストと彼の系統とを以て、人類間に於ける大勢力にして之に匹敵する者なしと承認するに至れるを知る者なり、誰か吾人がキリストの神性說を假設して如上の事實を說明せんとするを難んずる者ぞ、吾人若し此假設を容るれば萬難立ろに解け、問題となれる事實皆說明せらるゝを觀る、

若しキリストにして神性を有したりとせば、吾人は彼が舊約書の主

題となりしを怪まず、又彼が奇跡的に生れ奇跡を爲したるを奇なりと做すの要なし、吾人何爲れぞ彼の死せるに當りて全地暗黑となりたるを怪むべき吾人は却て奇跡微りせば之を訝かるべきに非ずや、天使が彼の誕生を豫告し彼の傳道に隨從し、彼の墓側に侍り彼の昇天する際に現はれたるが如き固より自然の勢なりと云ふべし、

千八百九十二年(明治二十五年)七月予箱根夏期學校より京都に還らんとて箱根峠を踰え沼津にて滊車に乘れり、時偶々小學兒童と官吏と停車場に集れり予之を觀て天下知名の士の沼津より滊車に乘らんとする者なるべしと察しぬ、然りと雖ども滊車の進行するに連れて奇觀を呈したるは、到る所の停車場に小學兒童と官吏と集まりて『萬歲』てふ祝聲歡呼湧くが如く、又洋々として國歌を唱ふるの樂響かざるはなき事なりき、予之を觀て其意を解し得ざりしも皇太子殿下が列車中に在

らせらるゝを聞くに及んで疑團氷解し、曾て見聞せし異常の喝采と送迎の設備との由て來りし因緣を解せり、若し斯る時に當りて異常の歡呼と設備と微りせば是れ却て怪訝に堪へざる思を起さしむべし、

キリストに於けるも亦此の如し、誰かキリストの品位を認めずして彼が爲せる奇跡的誕生、其甦生等を理會し亦之を信じ得んや、誰か彼の神性を肯はずして彼が述べたる駭くべき言を解し得んや、若し彼にして唯一個の人たるに止まらしめば、彼が言には頗る聽き苦しき者あり、隨て猶太人が彼冒瀆の罪を犯せりとて之を死刑に處したるも敢て怪むに足らざるべし、然りと雖ども若しイエスにして彼自らも明言せしが如く、神の子にして神の愛を人々に表はし生命の道を示し、多くの人に代りて贖となり其身を與へんが爲め父より來りし者なりとせば、而して彼は王の王、主の主にして世界は彼によりて造られたりとし、又彼

神性説は科學的也

の名は萬の名に優りて尊く、天にある者も地の上にある者も地の下にある者も、皆跪きて彼を拜すべき者なりとせば、吾人は彼の誕生の無比無類なるに驚くべからず、又天使が之を豫告せるを怪まず、又彼の生れたる時に當りて天軍現はれて彼を讃美し、後天使屢々現はれたる事あるを訝しく思ふべきの理ある事なし、是に於てか天より聲ありたるをも説明するを得べく、奇跡も亦其奇を失ふに至る、又彼が述べたる辭句中には、獨り神にのみ相應はしき者多きも其自然なるを説明すること難からず、若し彼に神性ありたりとせば其智慧俊秀にして其德清高なるをも解し易く、彼が敎訓の結果の强大にして古今に匹敵する者なきも敢て怪むに足らず、蓋し獨り神のみ充たし得べき人類最大の需要は彼によりて完うせられたり、

如上の事實を洩す事なく説明せんとて提出せられたるは唯此説あ

るのみ、而して是れ能く萬事を說明するに足る、是故に基督の神性說は正論にして吾人の據りて以て立つべき者なり、夫れ基督敎の信仰は妄信に非ずして科學的演繹の結果なり、キリストを以て神性ある救世主と看做しつゝある無數の基督敎徒は、欺かれたるに非ずして實に科學が如何なる範圍內に於ても確實なりと斷じ得べき基礎の上に、其信仰を築ける者なり、

基督と太陽

基督は猶ほ太陽の如し、吾人は今中天に輝ける太陽の如きキリストを說明するに、彼の神性を充分に許す事なくば、是れ恰も太陽中心說を棄てゝ顧みず、全く地球中心說によりて太陽系統を說明せんとするが如し、人或は地球を以て太陽系統の中心と斷じ、種々の想像を逞うして數個の現象を說明し得たりとせん、然りと雖ども彼が見界漸く廣遠に、又深奧なるに至らば、地球中心說の解し得べからざる數百の現象生じ

來るに駭かざるを得ざるべし、人或はキリストを以て單に一個の人、而かも顯著なる人、實に靈に充たされたる人なりと云ふ說を採りて、此の大問題を解釋し得ると思ひ、一時の安を偸むこと是れあらんも、其解ける所は僅かに此問題の或方面に過ぎざるべし、彼若し深く此問題を考察する事あらば、此說を用ゐて說明せられたるが如く見ゆる現象無きに非ずと雖ども、之と同時に解決し得べからざる多くの現象の殘れるを知るべし、想ふに偉大なる事實を一團として能く說明せんと欲せば、吾人は此說に賴るべからず、キリストは他の光を反射しつゝある月に非ず、亦太陽系統中にありて一中心點の周圍を廻轉しつゝある衛星に非ず、彼は實に此系統の中心即ち太陽にして光と熱と勢力との本源なり、歷史も各國民も全世界も彼が偉大の妙力に擒にせられて皆々彼の周圍に廻轉す、吾人は基督を此の如く解して始めて基督敎の全系統を

說明するを得べし、夫れ聖書に於ける基督は、其舊約書に現はれたると新約書に現はれたるとに論なし何れも神的なり、而して是れ實に吾人の要求せる救主に該當す、之よりも低き祭司の長は縱ひ人の罪を贖はんとするも、決して吾人が靈魂の強大なる渴望と人性本來の需要とを充たすに足らず、吾人は救主を如上の如く解してこそ、始めて吾人の渴望と需要とを充分に、又永遠に滿足せしむべきなれ、予輩は聖書を研究すること精密なるに隨ひ、愈々キリストを此の如く解すべきの要切なるを覺ゆ、聖書にては神的名稱を捕へて之をキリストに冠らしめたり、例へば舊約書のエホバは新約書中に引用せられたるが往々キリストと同一視せられたり、抑も受造者は父なる神を視たる事なし、然り死すべき人は未だ神を視し事なし、

未だ神を見し人あらず惟生み給へる獨子すなはち父の懷に在る者

のみ之を彰はせり（約翰傳一章十八節）、然ど父を見し者はなし惟神より來る者のみ之を見たり（約翰傳六章四十六節）

獨一死ざる者近くことを得ざる光に在して人未だ見しことなく又見ること能はざる者なり願くは尊貴と窮なき權力彼に有れアーメン（提摩太前書六章十六節）キリストは父或は神を人類に彰はせる者なり、彼は神の榮の光輝其質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持我儕の罪の淨めを爲して上天に在す威光の右に座しぬ（希伯來書一章三節）

・父は我に萬物を予へ給へり父の外に子を識る者なく子および子の顯はす所の者の外に父を識る者無し（馬太傳十一章二十七節）

彼は人の見ることを得ざる神の狀にして凡ての造られし物の先に

生れし者なり（哥羅西書一章十五節）

此の如き人は此世の神その心を盲したる不信者なり是れ神の像なるキリストの榮の福音の光をして彼等を照さゞらしめんが爲めなり
（哥林多後書四章四節）

基督の降臨

熟ら聖書を按ずるに、神が自己を外界に彰はさんとせる時は、天地創造に於ても亦其保存に於ても、或は啓示に於ても救に於ても、神はキリストを媒介として之を完うせるが如し、さればアダムより以來キリストの降誕に至る數千年の時期中キリストは絶えず此世に降りしなるべし、是故に啓示は何れも後に至りてキリストが、陽はに此世に降り人となりて人類の間に住み、遂に人類の爲めに其身を殺して惜む所なかりし行動の表號と看做すべき者なり、

約翰傳一章一節より三節までには、基督の生前に存在せる事を明細

に記述せり、キリストが約翰傳十七章五節及び二十四節に云へる所もパウロが哥羅西書一章十七節に於て云へる所も、能く之と符節を合するが如し、キリストは默示錄に於て己を指してアルパなりオメガなり始なり終なり首先なり末後なりと云へり、彼は王の王又主の主なりと稱せらる（默示錄一章八節十七節、二章八節二十一節六節、二十二章十三節、十七章十四節十九章自十三節至十六節等を參看せよ）、以賽亞書九章六節には『其名は奇妙また議士、また大能の神とこしへの父、平和の君と稱へられん』とありて、キリストを呼ぶに五箇の異なれる名稱を用ひたり、

神の屬性はキリストにも屬すと看做さる、即ち天地創造、其維持、死者を甦らす事等は、全能、全智、遍在等の神的屬性を示す者なるが、此等の屬性は直にキリストに適用せられたり、永遠と不變も亦彼が性質なりと

看做され、神にのみ捧ぐべき榮譽はキリストの享くる所とせらる（腓立比書二章九節より十一節までを參看せよ）

人々は祈禱を父なる神に捧ぐると共に、亦キリストにも捧げたり、洗禮式と祝禱とに於てはキリストは父及び聖靈と同格に取扱はれたり（帖撒羅尼迦前書三章十一、十二節同後書二章十六、十七節、哥林多前書一章三節、馬太傳二十八章十九節、羅馬書一章七節、哥林多後書一章二節）

キリストに神性ありと看做され、直に此神性を言明せる所あり、例せば『そは父凡ての德を以て彼に滿たしむる事は其聖旨に適ふことなればなり』（哥羅西書一章十九節）『それ神の充足れる德は悉く形體をなしてキリストに住めり』（同二章九節）『父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へ』（約翰傳十七章五節』

『彼（キリスト）は神の體にて居りしかども自ら其神と匹く在るところの事を棄難きことゝ意はず反て己を虛ふし僕の貌をとりて人の如くなれり既に人の如き形狀にて現はれ己を卑し死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受るに至れり是故に神は甚だしく彼を崇めて諸の名に超る名を之に予へ給へり此は天に在る者地に在る者及び地の下にある者をして悉くイエスの名に由りて膝を屈めしめ且もろ〳〵の舌をして悉くイエス、キリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり』（腓立比書二章自六節至九節）、聖靈は或は神の靈と呼ばれ或はキリストの靈と稱せらる（約翰傳十四章十五節より二十三節までを看よ）、キリストは先づ弟子に約するに、聖靈を賜ひて永遠彼等と偕に住むべきを以てしたるに、間もなく自己親ら再び彼等に就らんと明言す、而して二十節に云て曰はく『其日に爾曹我父に在り爾曹我に在り我爾

曹に在ることを知るべし』と、『二十一節にはキリストは、弟子に自己を示すべしと約束し、更に二十三節に至りてはキリスト父と相携へて彼を愛する者と偕に住むべしとの驚くべき約束を結びたり、

『若し神の靈爾曹に住まば爾曹は肉に在らで靈に在らん凡そキリストの靈なき者はキリストに屬ざる者也若しキリスト爾曹に在らば體は罪に緣りて死に魂靈は義に緣りて生きん若しキリストを死より甦らしゝ者の靈爾曹に住まばキリストを死より甦らしゝ者は其爾曹に住む所の靈を以て爾曹が死ぬべき身體をも生すべし是故に兄弟よ我儕肉の爲めに負ふ所ありて肉に從ひ役る者に非ず若し肉に從ひ役へなば死ぬべし若し靈に由りて身體の行爲を滅さば生くべし凡そ神の靈に導かるゝ者は是れ乃ち神の子なり』(羅馬書八章自九節至十四節)『爾曹も偕に彼の中に建てられたり是靈によりて神の居み給ふ所となるべ

甦生は神性を證す

き爲めなり』（以弗所書二章二十二節）『且つ爾曹既に子たる事を得しが故に神其子の靈を爾曹の心に遣りアバ父と呼ばしむ』（加拉太書四章六節）『爾曹信仰に居るや否や自ら省み自ら試むべし爾曹若し棄てらるゝ者ならずばイエス、キリスト爾曹の中にあり之を自ら知らざらんや』（哥林多後書十三章五節）『此に緣りて我儕の主イエス、キリストの父即ち天と地にある諸族の彼に由りて名を得し者の父に跪きて願ふは其榮の富に循ひ其靈を以て爾曹の衷の人を剛健にし又キリストをして爾曹の心に居らしめ給はんこと也』（以弗所書三章自十四節至十七節）

夫れキリストの甦生と昇天とは實に彼が神性を證し得て餘りありと云ふべし、彼自ら神性を保持せりと稱せり、然り彼は自ら神の子なりと云ひしを以て死刑に處せられたり、然り彼死したりと雖ども後ち死せる者の中より甦りたれば、彼の門弟と初代の基督敎徒等は、彼が甦生

基督は世界萬民の品性を陶治す

を以て神性の確證と看做したりき、トマス甦れる救主を見て叫んで曰はく『我主よ我神よ』と、神或は凡夫を死より甦らせ天に昇らしむる事もやあらん、然りと雖ども斯く爲すは人をして虛僞を信ぜしむるに加勢する所以なりと知らば、神焉んぞ詐欺者若くは自ら己を欺ける者を甦らす事あらんや、

若しキリストに神性なかりしとせば、彼が敎訓と其世界に及ぼせる結果とを能く說明し得べき說あるを觀ず、夫れイエスは最も狹量にして極めて排外的精神に強かりし猶太民族の中に生れたり、而して猶太國民なる者は、當時既に自由を失ひ宗敎も亦儀文に拘泥して氣力なく、數百年の久しき預言者絕えて起らざりき、此の如き時に當りイエスは世の賤む所と爲れるガリラヤ邊陬の一寒村に生れ、卑しき木工の家庭に成長し、極めて初等の敎育を受けたるに過ぎざりき、後彼己が側に無

心內の實驗は基督の神性を證す

學の徒を集め之を門弟として敎誨すること僅に三年を出でざるに自ら磔刑に處せられたり、而して彼が門弟は世の輕侮と迫害とを受けざるを得ざりき、然りと雖どもキリストは能く狹隘なる猶太國民と時勢とを超脫せり、故に縱ひキリストを信ぜざる者と雖ども、吾人の知れる限りにては基督敎は最善の敎にして、亦現今世界に於ける最大道德力なる事を承認し、其が年を逐ふて强大となりつゝある事を許さゞるべからず、而して斯の如き宗敎と眞理の體系とを世に給與したる者は實にキリストなりとす、基督敎は排外的に非ず、能く各國人種と有らゆる狀態とに適合して世界の廣きが如く廣濶なりとす、現に基督敎は地球上の各國民の品性を陶冶したり、又陶冶しつゝあり、實にキリストは人間以上に位する者たらざるべからず、

然りと雖ども予に取りてキリストの神性を最も强く證する者は、予

基督を神よりも低しと做す説

が心内の實驗的證據なりとす、彼は實に予が需要を充たし予が心情の慕ふ所を飽き足らしむ、是れ到底人間なる救主の能くすべからざる所なり、予は此事に至りては『自ら知れり』と斷言するを得べしと信じ自ら安んずる所あり、

吾人は是よりキリストの神性を許さゞる反對説の主要點を指摘すべし、

人或は曰はくキリストは自ら神よりも下に位する者なる事を告白すと（馬可傳二章七節、同十三章三十二節、馬太傳十九章十七節、約翰傳五章十九節、同六章三十八節、同十四章二十八節を參看せよ）然りと雖ども吾人の忘る可らざるはキリストは本來眞實の神たるに相違なしと雖ども、彼が地上に於て人の形を取りて神人間の中保者となれる間は、父に從屬すとはキリスト神性説の一部を成す者なる事なり（腓立比書二

章七節を看よ)、彼が『己を虚うして人の如くなれる』は、實に最大の謙讓心の致せる服從なりとす、彼は化身前には父と同等の位にありし事は、聖書中之を明示する所少からず(約翰傳一章一節より三節まで、同三章十三節、同六章六十二節、同八章五十八節、十六章二十八節、十七章五、二十四節、腓立比書二章五節六節、希伯來書一章二節、八節より十節まで)

キリストが肉を受けて地上に降り、仲保者の職能と事業とを保持せる間は、父に對し從屬的位置に立てり(約翰傳六章三十八節、十章三十六節、十四章二十八節、十七章二、四節、馬太傳十一章二十七節、哥林多前書十五章二十八節、加拉太書四章四節、腓立比書二章六節より八節まで以弗所書一章二十二、二十三節、哥羅西書一章十九節)、然りと雖どもキリストが職務と位置との上に於て、父に從屬したるは唯暫時の間なるのみ、彼は復た昔時の榮光と位階とに登れり、而かも彼が忍びたりし屈辱と彼

が爲せし事業とは、相並びて彼が榮光を天使の間に發輝せしむ、(腓立比書二章九節より十一節まで、哥林多前書十五章二十四節より二十八節まで、以弗所書一章二十、二十一節、希伯來書二章九節、默示錄五章十三節同三章二十一節、同七章九、十節、馬太傳十三章四十一節、同十六章二十七節、二十四章三十、三十一節、二十五章三十一節、二十六章六十四節、馬可傳八章三十八節、十二章三十六節、十三章二十六節、二十七節、十四章六十二節、十六章十九節、路加傳二十一章二十七節、同二十二章六十九節、同二十四章二十六、二十七節、約翰傳五章二十三節、同十三章三節、同十六章二十八節、同十七章四節、使徒行傳七章五十五、五十六節、羅馬書八章三十四節、以弗所書四章十節、哥羅西書一章十六節、同二章十五節、同三章一節、帖撒羅尼迦後書一章七、八節、提多書二章十三節、希伯來書一章二節より四節まで同八章一節、同十章十二節、彼得前書三章二十二節)

キリスト既に人と成り己が心意の機關として人性と人身とを備へたれば、其全智と全能とを運用するに當りて自ら之を抑制する所なかるべからず、吾人は固よりキリストが此屬性を棄てたりと思ふの必要なし、彼は唯之を運用するに當りて之に限りを附したるに過ぎず、夫れ全智、全能、遍在は永遠に神に屬する性質なり、而して眞實と愛も彼が内性に缺くべからざる屬性なり、彼は前者を抑制すべしと雖ども後者に至りては然らず、按ずるに古文書中にはキリストは地上にて己が大事業を成就せんが爲めに、必要なる事柄に關しては如何なる事にても之を知り又爲すの力を缺きたる形跡を示す所あるなし、キリストが其全智力を運用せる時はその深さに於きては無限なりしならんも、其範圍に於ては然らざりき、例せば世の終の來る時を確定するが如きは彼の爲さゞりし所なりと雖ども、是れキリストが此世に來りて爲さんとせ

し事業に直接何等の關係あるなし、却て基督教會は此の如き事を尋ね得ざるを以て其益なりと知るべし(馬太傳二十四章三十六節、使徒行傳一章七節)

馬太傳十九章十七節と馬可傳二章七節とは、キリストの神性を證するに妨げとならず反て之を證する者なり、キリストが青年に答へて『一人の外に善者は無し即ち神なり』と曰ひしは、實に猶太人がキリストの神性を認めざりしに因る、是れ猶ほマノアがヱホバの神たる事を認めざりしが故に己を神として禮拜する事をヱホバ自ら禁じたるが如し(士師記十三章十五節より二十二節まで)

又哥林多前書十五章二十四節より二十八節までに至る文辭も、往々キリストの神性説に反する者と爲されたり、然りと雖ども既に云へるが如くキリストは神人として仲保の職に就き、道德世界を導き以て救

はれ得べき萬人を悉く救ひ畢るの大目的を完ふし、宇宙間に於ける道德力を聚積して遂に絶望的に惡しき人々より惡を爲す力を奪ひ去るに至るまでは、父に對して從屬的位置に立つ者とす、事此に至ればキリストは其完成せる事業を父に奉還すべし、蓋し彼が大王國に永遠君臨しつゝある間に、神の道德界に起れる叛逆を平定すべき特殊の使命を果たし其統治を完ふするに至るべし、予は今千八百八十五年六月、『アンドーバル評論』の社說に出でたる所を拔萃すべし、『世に所謂キリストの仲保的王國なる者は、(往々餘り狹義に解せらるゝの嫌あれども)、受造者が悉く其救主たる首長、若くは君主を介して神の王座の下に跪きて之に臣從し、神は萬物の中に君臨する時に至りて全く其終極に達すべし、是に於てかアダムの犯罪若くは天使的惡靈の罪によりて、世に輸入されたる歷史は玆に終りを告げ、隨て制御し難かりし叛逆の爲め、一種異

樣の觀を呈せる統治も終るに至るべし、然りと雖ども此終りたるや單に萬事の結末たるに止まらず、亦未だ曾て能くする事も耐へ忍ぶ事も能はざりし程に、神の榮光照り輝く初めと成るべし、かくて茲に新たなる創造は生じ來らん、而して新たに造られたる者は其首長を介して尊貴の位に昇らん、此首長とは云ふまでもなくキリスト、イエスにして、常に神より無限の智慧と愛との啓示を受けて之を宇宙に布くべし、機斯の如く熟せば萬民は彼が宮殿に會して、彼の衷に亦彼を介して禮拜と讃美とを捧ぐべし』

哥羅西書一章十五節にはキリストを『萬の造られし物の先に生れし者』なりと稱せり、又默示錄三章十四節には彼を指して『神の造化の始めなる者』と呼べり、此二句は往々キリストの神性を否む者と看做されたり、聖書には最も貴重なる者、或は尊貴なる者、或は愛されたる者との意

義を表さんが爲めに、屢々『初めに生れたる者』てふ辭句を使用せるを見る、例せば出埃及記四章二十二節には神はイスラエルを『家子』と呼べり、又詩篇八十九篇二十七節には神はダビデを以て其初子となし、地の王たちのうち最も高き者となさんとすと云へり、蓋しキリストに至りて此事完成せらるべきを云へるなり、又耶利米亞書三十一章九節には『我はイスラエルの父にしてエフラエムは我長子なればなり』とあり、又希伯來書十二章二十三節には『天に錄されたる長子どもの敎會』とあり、又羅馬書八章二十九節には『それ神は預じめ知り給ふ所の者を其子の狀に效はせんと預じめ之を定む此其子を多くの兄弟の中に嫡子（最も尊き者）とならせんが爲めなり』とあり、

默示錄三章十四節に『神の造化の始なる者』とあるも亦此の如く解すべきなり、茲に『始』と譯せる希臘語は、原始若くは第一原因、若くは起原と

云ふ意なり、新約僞經の一なるニコデモの福音第一卷第一章にサタンを死の始め又は罪の根源と呼べるは頗る相似たる用語法なり、

要するに父は人を救はんとするに當りて子と聖靈とを遣はせし者なれば、職務上の席順より謂はゞ同僚中に第一位を占むるを常とす、是れ猶ほ子と共に天下を統治する皇帝は子の上位に座するが如し、哥林多前書三章二十三節に『爾曹はキリストの屬キリストは神の屬なり』とあるも此例なりと云ふべし、又約翰傳十七章二十一節より二十三節までに出でたるキリストの捧げたる最終の祈禱も全く之と符合す、キリストは己と父と一なる事を利用して信徒と己との間に存する神秘的合一を表明せり、信徒はキリストと斯く合一せるを以てキリストは神の屬なるが如く信徒はキリストの屬なり、

キリストに神人の兩性が相融合したりし事に就きては茲に深奥な

る神秘の存するありて吾人の揣摩すべからざる所ならん、蓋し神人の性質は眞正の人性と神性との融合にして、神人の神性は即ち彼が自我を成せる精粹即ち人格なり、神と人との類似は此の如き融合を可能ならしむべし、

神の三一性に關しては予は全く神の啓示せる所、殊にキリストの言によりて啓示せる所のみを述ぶるの外なし、抑も無限大の宇宙を創造し、維持し、動かし、活かしめ、又發達せしむる神が存在の性質と狀態とを測らんとは、之を外延よりするも將た内包よりするも予が力量の及ぶ所にあらず、又予が力の之を發明せんこと到底能はざる所なりとす、予は虔んで神の前に伏し神の己に就て啓示せる所を受けざるべからず、

天父は人格にして神性を備へたる者なる事は明かに啓示せらる、故に彼を記するに人代名詞を用ゐたり、（約翰傳十六章二十三節、同十七章

二十一節より二十四節までを見よ）、キリストも亦神性を備へたる人格にして聖靈も亦然りと啓示せらる、又キリストと聖靈とは父と異なると共に亦相互に異なる事も明なり（約翰傳十五章二十六節）

三一性と光線

如何なる譬喩も充分に此の大問題を説明するに足らずと雖ども、吾人は假りに光線を撰ばんとす、光線は必ずスペクトラム中の三基色を含まざるはなし、然りと雖ども其の光や常に白色にあらざるはなし、今吾人は光を用ゐて神を表はさんに白光は以て父を表はすべし、此の白光三稜鏡を通して諸色に分かれ吾人に知覺せらるゝに至れば是れ子を表はす者と爲すべし、而して光線中に存する熱は以て聖靈を表はすに足る、一物体に三個の存在物即ち光と色と熱と存する事は考へ得べからざる事に非ずして現實吾人の眼前にあり、

神は此の如き區別の存する事を知る、吾人は其例證として約翰傳十

七章二十四節、羅馬書八章二十七節、哥林多前書二章十節等を參看すべし、之を讀む者は父は世の基を置かざりし頃にも既に子を愛し、神は靈の意を知り、靈は神に就ける深き事をも探る者なる事を知るべし、神に此の如き區別の存する事を示す辭句を求むる者は宜しく以下の諸節を看るべし、

イエスバプテスマを受けて水より上れるとき天忽ち之が爲めに闢け、神の靈の鴿の如く降りて其上に來るを見る、又天より聲ありて此は我心に適ふ我愛子なりと云へり、（馬太傳三章十六、十七節）

民みなバプテスマを受けたるにイエスも亦バプテスマを受て祈るとき、天闢け聖靈鴿の如き狀にて其上に降りぬ、又天より聲あり云はく汝は我愛子我喜ぶ所の者なり（路可傳三章二十一、二十二節）

ヨハ子また證して曰ひけるは我靈の鴿の如く天より降りて其上に

止れるを見たり（約翰傳一章三十二節）

是故に爾曹往きて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ（馬太傳二十八、二十九節）

神の遣はしゝ者は神の言を語る蓋神之に靈を賜ひて限量なければなり、父は子を愛して萬物を其手に授けたり（約翰傳三章三十四、三十五節）

我父に求めん父必ず別に慰る者を爾曹に賜ひて窮なく爾曹と偕に在しむべし、此は即ち眞理の靈なり、世之を接ること能はず、蓋之を見ず且つ識らざるに因る、されど爾曹は之を識る、そは彼爾曹と偕に在り且つ爾曹の衷に在ればなり……イエス答て彼に曰ひけるは若し人我を愛せば我言を守らん且我父は之を愛せん、我儕來りて彼と偕に住むべし……我名に託りて父の遣はさんとする訓慰師すなはち聖靈は

衆理を爾曹に敎へ亦我が凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし、（約翰傳十四章十六、十七、二十三、二十六節）

ペテロ曰ひけるはアナニアよ何故に爾の心サタンに滿たされ聖靈に向ひ僞りて地所の價の幾分を藏す事をせし乎、地所未だ售らざる時は爾の有ならずや已に售りたりとも亦爾の權に屬るならずや、何故に爾の心此事を發念しや爾人に對ひて僞るに非ず、神に對ひて僞れるなり（使徒行傳五章三、四節）

若し神の靈爾曹に住まば爾曹は肉に在らで靈に在らん凡そキリストの靈なき者はキリストに屬かざる者也若しキリスト爾曹に在らば體は罪に緣りて死に靈は義に緣りて生きん、若しキリストを死より甦らしゝ者の靈爾曹に住まばキリストを死より甦らしゝ者は其爾曹に住むところの靈を以て爾曹が死ぬべき身體をも生すべし…………聖靈

も亦我儕の荏弱を助く我儕は祈るべき所を知らざれども聖靈自ら言ひがたきの慨歎を以て我儕の爲めに祈りぬ、人の心を察たまふ者は聖靈の意をも知れり蓋は神の心に遵ひて聖徒の爲めに祈ればなり（羅馬書八章九、十、十一、二十六、二十七節）

賜は殊なれども靈は同じ職は殊なれども主は同じ、また行爲は殊なれども一切の事を衆ての人の中に行ふ神は同じ、（哥林多前書十二章四、五、六節）

願くは主イエス、キリストの恩と神の愛と聖靈の交際爾曹衆と偕に在らんことをアーメン（哥林多後書十三章十四節）

夫れ彼に由りて我儕二者一の靈に在りて父に近く事を得るなり（以弗所書二章十八節）

體は一、靈は一なり爾曹の召されて有つ所の望の一なるが如し、主一、

信仰一、バプテスマ一、神すなはち萬人の父一なり彼は萬人の上にあり萬人に貫き萬人の中に在り(以弗所書四章四、五、六節)

主に愛せらるゝ兄弟よ爾曹の爲めに我儕常に神に謝すべき也、そは神始より爾曹を簡び眞理を信ずることと靈の聖めを蒙ることに因て救を得しめ給へばなり、神我儕の福音を以て爾曹を此福に召き給へり爾曹をして我儕の主イエス、キリストの榮光を得しめん爲めなり(帖撒羅後書二章十三、十四節)

然れど我等の救主なる神の慈と人を愛し給ふ愛の顯はれし時彼我儕が行ひし所の義しき功に由らず唯その矜恤に循ひ重生の洗と聖靈に由りて新にする事とを以て我儕を救へり聖靈は即ち神我儕をして其恩により義とせられ嗣子たるを得て窮なき生命を望み待たしめん爲めに我儕の救主イエス、キリストに由りて豐に我儕の上に注ぎ給へ

る所のもの也（提多書三章四、五、六、七節）

況して永遠靈により瑕なくして己を神に獻げしキリストの血は爾曹に活神を奉事らせんが爲め死の行を去らしめて其心を潔むる事を爲ざらん乎（希伯來書九章十四節）

イエス、キリストの使徒ペテロ書をポントガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散りて處れる者即ち父なる神福音に順はしめイエス、キリストの血に灑がれしめんとて其預じめ知りたまふ所に循ひ靈の聖潔をもて選び給ひし人々に贈る願くは爾曹に恩寵と平康の增さんことを（彼得前書一章一、二節）

愛する者よ爾曹其德を至潔き信仰の上に建て聖靈に感じて祈り自己を守りて神の愛の中に居り我儕の主イエス、キリストの永生を賜ふ其矜恤を待つべし（猶太書二十、二十一節）

予輩はキリストの神性を論ぜる時、既に聖語を引照してキリストの肉と成らざりし頃にも、キリストと父との間に區別の存する事を示せり、今キリストの語に徴するに此の如き區別は、彼の甦生して天に昇れる後と雖ども猶ほ現存するを知るべし、試に左の文辭を參照せよ、

夫れ人の子は父の榮光を以て其使等と偕に來らん其時おのおの行に由りて報ゆべし(馬太傳十六章二十七節)

其時人の子の兆天に現はる、また地上にある諸族は哭き哀み且つ人の子の權威と大なる榮光をもて天の雲に乘り來るを見ん、(馬太傳二十四章三十節)

人の子己れの榮光をもて諸の聖徒を率ゐ來る時は其榮光の位に坐すべし(馬太傳二十五章三十一節)

イエス彼(祭司の長)に云ひけるは爾が言へる如し且つ我爾曹に告げ

ん此後ち人の子大權の右に坐し天の雲に乘りて來るを爾曹見るべし(馬太傳二十六章十四節)

然るにステパノは聖靈に滿たされ天を仰で神の榮光と其右にイエスの立てるを見て曰ひけるは視よ我天ひらけて神の右に人の子の立てるを見る(使徒行傳七章五十五、五十六節)

罪を定むる者は誰ぞや死にて復た甦へり神の右に在りて我儕の爲めに禱告し給ふキリストなる乎(羅馬書八章三十四節)

是れ自ら定め給ひし所なり即ち期の滿つる時に至りて或は天に在り或は地にある萬物をキリストに歸せしめんが爲めに定め給ひし所なり……即ちキリストに行ひし所にして彼を死より甦らせ諸の政と權威と能力と宰治また此世のみならず來らんとする世にも凡て稱ふる所の名の上に置き天の處にて己の右に坐せしめし能なり(以弗所

書一章十、二十、二十一節）

既に爾曹キリストと偕に甦りたれば天に在る者を求むべし、キリスト彼處に在りて神の右に坐し給へり（哥羅西書三章一節）

彼（キリスト）は神の榮の光輝、其質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持ち我儕の罪の淨めを爲して上天に在す威光の右に坐しぬ（希伯來書一章三節）

我云へる所の肝要は是の如き祭司の長の我儕に在ることなり彼は天に於て大なる威光なる者の位の右に坐せり（希伯來書八章一節）

然れど此人（キリスト）は一次罪の爲めに一の犧牲を獻げて窮りなく神の右に坐す（同十章十二節）

イエス即ち信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし彼は其前に置く所の喜樂に因りて其恥をも厭はず十字架を忍びて神の寶座

神の唯一性と三一性

アリアス派とユニテリアン派

の右に坐しぬ（同十二章二節）

イエス、キリストは天に往て今神の右に坐せり、諸の天使權威ある者能ある者皆な彼に服ふなり（彼得前書三章二十二節）

我また寶座に坐する者七の印にて封印せる内外に文字ある卷を其右の手に持てるを見たり……此羔進みて寶座に坐する者の右の手より卷を取れり（默示錄五章一、七節）

聖書は神の獨一を明白に啓示し得て餘あり、即ち神は唯一なり、されば吾人の解釋せざるべからざる問題は、是まで既に述べたる區別と神格の獨一とを如何に調和すべきかと云ふにあり、吾人はキリストを論ずるに當りて此問題の頗る切實なるを覺ゆ、而して從來三方面より此問題を解決せんと努めたりき、

（第一）キリストの神性を縮少して之を神よりも小なりとし、受造者中

三神説

サベリアス説

正統派の三一説

の最大なる者、神靈に滿たされたる人、殊に神より才能を賦與せられたる大人なりと看做す説にして、彼のアリアス敎、ソシヌス敎、及び近代のユニテリアン敎は皆な此流派に屬す、

（第二）神の獨一なる事を否定し、父と子と聖靈とを以て絶對的に異なれる三個の存在者と做す説にして之を三神説と稱す、

（第三）父とキリストとの間に存する區別を否定し、獨一の神は天より降りて地に來り、人と成れりと做す説にして、之をサベアス説と稱す、

以上の三説は何れも神が聖書に於て啓示せる所と、キリストの敎へたる所の大意に反せるを以て、予は之を棄てざるべからず、蓋し眞理は第二説と第三説との中間に存する者の如し、夫れ神の人格は廣大にして我人格は遠く之に及ばず、神は無限の人格にして其內には父、子、聖靈として吾人に啓示せられたる三區別を包容するを得べし、夫れ神の一

致は我が一致の如く狹隘ならずして、更に一層廣濶にして複雜なる一致なり、所謂三箇の區別とは人類間に於ける三人の如く絶對的に別てる區別に非ずして、其間に内部の融合存せざるべからず、されば此の三者の意志は一個の意志を形つくり、其意識は亦一意識となり、其喜憂も亦一個の喜憂となりて、三者一を致す者なり、故に此三者は一神なり、

予は縱ひ充分に如上の事を理解せざればとて直ちに之を棄つべきに非ず、予豈に無限なる神の存在狀態を悉く理解するを期すべけんや、ロッツエも云ひし如く『人類の人格は不完全なる人格にして唯神の人格のみ完全の人格なり』而して其人格の内には智力、感性、意志、自由、道德、自己意識等を包容す、是れ等は何れも人類の能力と之に類する狀態とに優れること至大なりとす、然り人類のと大に異なりて遙かに之に卓越せる能力、行動、存在、狀態等實に存すべしと雖ども、吾人は之に就て何

等の概念をも懷き得べからざるやも知るべからず、『エホバ宣給はく我思は爾曹の思と異なり我道は爾曹の道と異なれり天の地よりも高きが如く我道は爾曹の道よりも高く我思は爾曹の思よりも高し』（以賽亞書五十五章八、九節）

此世にありて吾人の理解することも、亦說明することも能くすべからざる神の業など擧ぐれば數ふるに遑あらざらんとす、然るに何故特に神の無限なる性質と存在とを捕へ來りて之を充分に理解し亦說明せんとするか、蓋し吾人の力量は其器小にして之を量るに適せざるなり、トルックの云へる所稍々剴切なる者あり、曰はく『殊に近世に於て救の事を論ずるに當りて失敗せるは、之を分解すること酷に過ぎたればなり、是れ猶ほ太陽の事を考ふるに當りて之を太陽として大觀せず、光線より成れる者なりと看做して、光線を一々太陽より剝奪し去りて考ふ

る事あらんには、太陽も自ら消失するに至るが如し、卿は光線を一束に結び合はすを得ず、亦大洋を一小杯に收むべからず、予は實に之を果さんと試み遂に失敗に畢れり、然り予は理論的に習得したる定式上の平方積を信神の大神秘に應用したりと雖ども、此平方積は予が掌の中に縮小したるを以て、到底大神秘を量るに堪へずして遂に之を棄てざるを得ざりき』と、

熟ら聖書を按ずるに、神はキリストによりて自己を人類に啓示しキリストによりて萬物を創造し、亦支持せり、又キリストによりて救の道を示し、人の罪を贖ひ、キリストを介して世を審判するや明なり、又神は聖靈を介して人心内部の靈的事業を遂行する者にして、人類を誘ひ之を再生せしめ、之を導き又之を聖ならしむるは實に聖靈の働きなりとす、

基督の働きと聖靈の働

神より出づる者は皆なキリストの働きにして、神に歸る者は悉く聖靈の働きなりと云ふべし、キリストは外的啓示の機關にして、聖靈は内的啓示の機關なり、キリストは天に於ける我仲保者にして、聖靈は我靈魂内に於ける仲保者なり、キリストの事業に關しては吾人は所働的位置に在り、聖靈の事業に關しては吾人は能働的位置に在り、

アソス山教會の古畫

希臘國アソス山に古き教會あり、三位一體を表現せんとて描ける一畫を藏す、一面より之を望めば視ゆる所唯十字架上のキリストのみ、他の一方面に向へば吾人の眼球に映ずる者は唯聖靈の記號たる鴿あるのみ、然るに之を正面より眺むれば見ゆるは唯父のみ、吾人が三位一體てふ大神秘の前に佇立する時は稍々之に類す、吾人は立場の異なるに循ひて或は三位中の父を視る事あり、或は子を視る事あり、或は聖靈を視る事あり、然りと雖ども吾人と雖ども我が見らるゝ如く自ら見、我知

らるゝ如く自ら知るの日に至らば、神の眞實相は一致に反せざる三個の區別を有せる所の一致なることを知るべし、

吾人は神は一なると同時に亦三なりとは云はず、神は三中に含める一なり、神は精粹なると同時に亦屬性なるには非ずして、屬性中に含める精粹なり、夫れ神の一致は無雙絶倫にして、之と類を同ふする者は他に求め得べからず、彼は實に唯一の神なり、

神の人類に與へたる啓示中、最も重要にして其中堅とも云ふべきは、キリストが罪人を救はんとする事業是なり、予は贖罪を以て神が最も智慮あり效力ある方法を用ゐて人を救はんが爲めに、キリストの謙讓と生涯と、苦難と死と、甦生と榮光と、彼か現時爲しつゝある仲保的行動とを介して成就せる事業なりと定義せんと欲す、吾人は熟ら神の品性と、人類が大に要求しつゝある救助と、神が吾人の身體に治療の道を備

舊約書はメシヤ的也

へ給ふ事實と、人類が相互に應援せんと欲する衝動と、時の古今を問はず民の文野に論なく罪に對しては犧牲の伴ふを常とする事實とを考ふるに、神が此の如き事を爲すは吾人の豫期する所なり、吾人は古代國民の多くが專ら人を罪より救はん者の現はるゝを期望せしを知る是れ蓋し神の人類と結べる契約の古代に存したるを暗示する者の如し、

舊約聖書中には、此の如き救主の來るべきを約束し、又預言したる所少からず、否なメシヤなる語を深く廣き意義に解せば、吾人は舊約書全部を捕へて之をメシヤ的なりと云ふを得べし、蓋し舊約聖書はキリストの來らんとする準備を記錄し、彼が人類の爲めに奏せる大業の原型、標號、預言等を記せる書冊に過ぎずと云ふべきなり、上古にありては創世記三章十五節に於ける原始福音より以降、後代預言者に現はれたる基督の王國の榮光燦爛たる表象に至るまで、一として來らんとするメ

シャと其事業とに就ける預言の發達せるを示さゞるはなし、舊約書には踰越節あり、踰越節の羔あり、罪祭あり是れ皆な『世の罪を任ふ神の羔』を暗示せる者なり、舊約書に祭司のあるは後に來らんとする大祭司長の表號なりと云ふべし、以賽亞書第五十三章は明かにキリストの贖罪的事業を描ける者なり、而してキリストは案に違はず此世に降りて如上の標號と預言とを完ふせり、『贖ふ』『代贖金を拂ふ』『掩ふ』てふ語に譯せられたる原語は、何れも新舊約兩全書に亘りて現はれたるキリストと其大業とを示さんが爲めに使用せられたり、

吾人新約書全部を通讀し、キリストと使徒との敎ふる所を按ずるに、キリストの地上に來るや實に特殊の任命を負へり、而して此任命の中堅とも稱すべきは彼の死なりしなり、實に彼は其傳道せる間にも始終己が身を『多くの人に代はりて贖ひとして』献げざるべからざるを自覺

せし者の如し、夫れ彼の死には尋常人の十字架にて死せる者と日を同ふして語るべからざる者あり、何となれば尋常人の十字架上に磔せらるゝや、其苦痛二日乃至六日に亘るを常とするに、キリストの苦痛は僅かに數時間を經過したるに過ぎざればなり、是れ蓋し彼が十字架に磔せらるゝに先だち、既に激甚なる心痛を嘗めたるに因るなり、（約翰傳十二章二十七節、路加傳二十二章三十九節より四十六節迄を參照せよ）、聖書はキリストの死を以て人類救濟の必要條件なりと看做して之を重んせり、實にキリストの苦難と死とは人類の罪惡に關與する所ありき、吾人の罪赦されて吾人の贖はるゝはキリストの血あるに因る、キリストも其弟子も之を言明せる事二十回の上に出でたり、キリストは恰も吾儕に代はりて苦しみ又死したるが如し、舊約書中に出でたる犧牲と儀式とは正しくキリストを預告せる標號なり、キリストの十字架上に

死するやエルサレム聖殿の幔、上より下まで裂けて二となれり、キリスト來りて律法と預言者とは完ふせられたり、キリストは吾人に告ぐるにモーゼと預言者とは己と己の事業とに就きて記述せる者なるを以てす、(路加傳二十四章四十四、四十六節、約翰傳一章四十五節、五章三十九、四十六節を參看せよ)、パウロ曰はく『我儕の踰越即はちキリストは既に宰られ給へり』と(哥林多前書五章七節を看よ)

贖罪說の細別

贖罪說に種々あり例せば(1)德化說即はちキリストの苦痛と死とは罪人をして悔改して神に歸順せしむる力ありと做す說、(2)倫理說若しくは滿足說にして、贖罪の目的は神の公義若しくは神の倫理性を滿足せしむるにありと做す說、(3)德政說にして、キリストの大業は神の道德的政治を鞏固にし、神の忠臣をして一層忠節を拔んずるに至らしむと做す說、(4)神秘的冥合說にして、キリストの贖罪は信徒とキリストとを

冥合せしむるに了ると做す說の如し、

以上の諸說は何れも大眞理を含まざるはなしと雖ども、何れも眞理の全部を表明するに足らず、夫れ神の行動する所は皆な最善の方法に依らざるはなし、即ち神の爲めにも罪人の爲めにも、凡ての道德的存在者の爲めにも、最も善良なる方法を擇ばざるはなし、而して此最も善き方法は凡ての道德的存在者が、直覺的に要求する所を充たすべきや疑なし、罪は神性と相容れず、隨て神の宇宙を破壞するに至るを以て神の嫌惡する所たり、故に神は自ら之を嫌惡する旨を示現し了るに非ずんば、充分に安んじて罪を赦す事能はざるべし、蓋し此種の示現は能く聖なる天使を滿足せしむべし、罪人と雖ども神が此の如き示現を爲すを觀て後ち始めて心に完全なる平康を覺ゆべし、

フェアベルン博士其著『近世神學に於けるキリストの位置』第百八十

二頁に云へる事あり、曰はく『罪を斯の如く判斷するは止むを得ざるに出づ、蓋し罪なる者は事實にして忘却すればとて直ちに之を絶滅すべきに非ざればなり、夫れ事實は到底滅ぶ事なし、殊に惡業を犯せるの際之を記憶する者二人ありて、甲の良心は之を譴責し、乙の良心は大に嚴責を蒙り本人自ら己が所業の惡なるを認め、又然りと告白せる場合の如きに至りては、到底此事實を滅ぼすべからず、是故に縦ひ罪人は其罪を赦さるゝことありとするも、彼は未だ曾て犯罪せしこと無きが如く感ずること能はず、彼は自己の眼前に無罪なる者の如く立つを得ず、亦神の前にも斯く立ち得べしと信ずる能はず、凡ての善の本たる神が輕輕しく看過し得る事は決して重大の惡たるべからず、若し神が罪を赦すに當りて何等の痛痒をも感ずる事微りせば、人之を反覆するも何等の苦痛を覺ゆる事なかるべし』と、

基督の屈辱は極惡漢を悔改せしむ

若し夫れキリストは己が榮光を棄て、己を卑ふし又虛ふして人となり、地上に生活し、譏られ、十字架上にて死刑に處せられ、以て人類の爲めに己が身を献じたるを目擊するに至らば、罪なき道德的受造者の全團体も其心動くべきや論なし、是れ實に罪の怖るべき事と、律法及び之に服從する事の價値と、神の品性、其愛、其恩惠、其寬忍、其克己等の深さとを示すに足る、隨て神に忠義なる者をして永遠に忠節を竭さしむるに至るのみならず、亦能く凡ての道德的存在者をして罪人の價値巨大なる事を一層強く感せしむるに至るべし、罪人の價値は大なるを以て神をして之れを救はんが爲めには無限の事業を爲さしめ、又無限の苦痛を忍ばしむ、キリストの事業は實に罪人の肺腑を突き、之れを神に還らしめ、キリストと偕に活ける永遠の冥合を遂げしむ、然り彼れが事業は神を人類に啓示する者なり、隨つて強く罪人の注意を惹起し、己れが罪の

國王貧民窟の虎列剌患者を救ふ

大いなるを感ぜしめ其の心爲めに碎けて罪を悔改し、復た神に歸るに至らしむ、

千八百八十四年夏虎列剌病以太利國に發生し、殊にネープルスにありては其勢猖獗を極む、當時自ら進んで避病院に在勤せる英國の醫師、同市の慘狀と國王ハンバルトの行幸に伴ひ來れる結果とを左の如く描きたり、『ネープルス當時の狀態は尋常人の想像し得べき限りに非ず、當時新聞紙は其實狀を記述せざりき、然りと雖ども其實を述ぶれば當時市民は恐怖の念に驅られて蠻行を敢てせり、虎列剌病は市中の下層に位する貧民窟にのみ限りて他に蔓延せざりければ此疾疫に罹れる地方の民衆は怒氣激甚にして制抑すべからず、されば富有の人にして市內の上位にありと認めらるゝ區域に住む者の出でゝ貧民窟を訪問せんことは頗る危險の業なりき、富者は彼等を救助せんとしたるに彼

等は反て之を惡むこと蛇蝎の如し、今一例を擧げんに當時ネープルス市に慈悲心に富める希臘の富豪ありき、日々馬車を驅りて貧民窟に入り險を冒して肉羹、葡萄酒、醫藥等を携へ之を病者に給與するを常としたれども、民衆は彼が調理せる物品は憐憫の情、心の中に充ち自ら溢れて外に發したる者なるを認めず、之を受くるを肯はざりければ彼は止むなく自ら金を施して之を受けしめんと奬勵するに至りたりき、然るに窮民は苦しみて愈々狂し、遂に暴となり、希臘人の彼等を救助せんとて物品を與ふるを憤り、或日彼を襲撃し其馬を屠り其馬車を毀ちたれば、彼は辛うじて身を以て逃がるゝを得たり、此時に當りて民衆は富豪を威嚇するに恐怖すべき亂暴を以てす、叫んで曰はく『何故吾人は山上に奢侈を極むる富豪の徒をして復た安全にして彼處に還らしむるや』と、彼等の欲する所は富豪が虎列刺病に襲はるゝを見んことなり、是に

於てか彼等は虎列剌病にて死せる者の屍を携へ、之を健康と富饒との榮ゆる大厦中に投じて疾を發せしめ、而して富豪が其同胞の死するを見て慟哭するを聽かんことを冀へり、故に政府は晝夜警戒して虎列剌病者の屍を屋外に出さしめざらんと努めたれども、事遂に失敗に了らんとする危急の時に當りて國王ハンバルトはネープルス市に行幸せられたるを以て擾亂漸く鎭定し、ネープルスは爲めに安全なるを得たり、彼等曾て希臘人を襲擊せり、今其富と健康と位置とに於て彼に讓らざる國王來たれるに之を擊たざりしは何ぞや、是れ他なし國王は同胞中の一人として彼等に臨みたればなり、王は彼等と危險を共にし日々親ら貧窮なる民家に生活せり、彼亦貧民と對話するにネープルスの方言を用ゐて或は病者を看護し、或は將に死せんとせる者を其腕にて抱きたり、死せる者あれば彼輙はち衆と共に哭したり、國王は實に貧民の

十字架の感化

同胞となりたれば、彼等が心中の憤怒は氷解して王の命に從ふこと恰も小兒の如くなれり、』

如上の事蹟は全國民に大感動を與へ、國民と王とを一層親密に結合し、民をして益々君主に忠義を竭さしむるに至れり、

キリストは實に憐むべき罪人たる吾儕の間に寄りて吾儕の貧寒なる草廬に其生涯を送り、吾人と共に俗語にて會話し、我儕の恙を受け、我儕の病を負ひ、我儕と共に泣き、我儕の爲めに死せり、若し是れをも罪人の心情を感激せしむるに足らずとせば、何者か之を能くすべき、キリストが曾て『我若し地より擧げられなば萬民を引きて我に就らせん』と云へる中には、意義深長にして測るべからざる者あり、蓋しキリストの十字架を觀ん者は、其中に大勢力の潜めるを知るべし、想ふに其力強くして罪人を悔改めしむるに有効なること、聖靈の直接人心に及ぼす恩化

を除けば、之と比すべき者なかるべし、是れ實に使徒等の說敎の題目たりしなり、（使徒行傳十章三十六節より四十三節まで同十三章十三節より十六節まで哥林多前書一章十七、十八、廿三節、同二章二節哥羅西書一章二十節等を參看せよ）

今古基督敎會の使用せる讃美歌はキリストの十字架の偉力を謳ふて止まず、左に示すバオリングの作に係かる讃美歌は今古を通じて基督敎會に遍滿せる感じを表はすに足る者と云ふべし、

一、うつりゆく世にも　かはらでたてる
主の十字架にこそ　我はほこらめ

二、聖書のひかりは　つみをあがなふ
十字架のうへにぞ　みなあつまれる、

ワッツも謳ひて云へり、

さかえのきみの　十字架をみれば
とみもほまれも　のぞみもなべて
ものゝかずかは　ほこるにたらず

ステールも左の如く謳へり、

わが身ののぞみは　たゞ主にかゝれり
十字架のみもとに　わが身はひれふす
あゝ汝はわが主ぞ　わがすくひぬしぞ
わがにへわがいのち　わがすべてなるぞ

假りにキリストは十字架上に磔刑せらるゝ事なしとするも、若し悲

痛激甚の極ゲッセマネの園中にありて、獨り寂寥の死を遂げらるゝが如き事もあらんには、彼が贖罪の有効なることは十字架上に死して奏せる贖罪に讓らざる點もあるべしと雖ども、此の如き場合に於きては人心を感動せしむるの妙力大に減殺せらるべきや論なし、若し我儕にして實際十字架上のキリストを見ざりせば、彼の幾百万の聖徒の謳ふ所と爲れる『いさをなきわれを、血をもてあがなひ……………』と云ふ句にて始まる讃美歌、及び『つみの重荷を、　エスきみにぞ　まかせまつりて　やすらはまし……………』と云ふ句にて始まれる讃美歌等は、到底作らるゝ事あり得べしとは思はれず、想ふにキリストの贖罪的事業は、彼が十字架上の死と甦生と昇天とに於て其極に達したり、是れ實に神の無限の愛と力と智慧とが、罪人の注意を促かし其心情を感化して、能く神を愛せしめ又之に從はしめ、更に進んで神の愛と神性の道徳的承

信徒と基督と相融合す

認とを宇宙全體の上に印せんが爲めには、此の右に出づべき有力なる手段あるべからず、此方法は實に罪人を罰するに優りて過大の勢力ある者なるを以て、神は此方法を擇びて之に安んぜり、

予は贖罪論中の德化說を解すること上の如し、吾人は之を狹隘ならしむる絆を斷ちて、其中には宇宙間に於ける凡ての造られたる道德的存在者と、神とを包容する程之を廣濶ならしめざるべからず、即はち贖罪の結果の及ぶ所は、罪人と其他神に造られたる道德的存在者と、及び神とを道德的に感動せしむるにありと云はざるべからず、

此外贖罪の結果と稱すべきもの尙一あり、即はち信徒のキリストと融合すること是なり、新約聖書には此融合と結果とを記述し、表號を以て之を描ける所頗る多し、例せば信徒はキリストによりて擇ばれたり、(以弗所書一章三節より五節まで提摩太後書一章九節)、信徒はキリスト

の中に造られたり(以弗所書二章十節)、信徒はキリストの中に聖靈を以て印せらる(以弗所書一章十三節、四章三十節、哥林多後書一章二十一、二十二節)、信徒はキリストの中に受けられたり(以弗所書一章六節又馬太傳三章十七節、十七章五節、約翰傳一章十二節、羅馬書八章十四節より十七節まで、二十九節三十節、加拉太書三章二十六節、四章四、五、六節等を參看せよ)、信徒はキリストと共に十字架に釘けられ彼と共に甦れり(羅馬書六章四節より八節まで加拉太書二章二十節、提摩太二章十一節、以弗所書二章五、六節、哥羅西書二章九節より十四節まで同三章十一節)、信徒は建築物にしてキリストは隅の首石なり(以弗所書二章二十節より二十二節まで彼得前書二章四節より六節まで以賽亞書廿八章十六節詩篇百十八篇二十二節馬太傳二十一章四十二節)、信徒は羊牢にしてキリストは牧者なり(約翰傳十五章一節より八節まで)、信徒は肢にしてキリ

ストは頭なり(羅馬書十二章四、五節哥林多前書六章十五節、十章十六、十七節、十二章十二、十三、廿七節、以弗所書四章十二、十五、十六節、五章廿三、三十節、同一章二十二、二十三節、哥羅西書一章十八節)、信徒は新婦にしてキリストは新郎なり(馬太傳九章十五節、馬可傳二章十九節、約翰傳三章廿九節、哥林多後書十一章二節、以弗所書五章二十五、廿六、廿七節、默示錄十九章七、八、九節、二十一章九、十節、二十二章十七節)、信徒はキリストの中に一となれり(約翰傳十七章十一、二十一、廿二廿三節、十四章二十節、加拉太書三章廿八節)、信徒と神全體とを融合せしむる綱となるものはキリストの靈とも稱せられたる事ある聖靈なり(約翰傳十四章十六節より廿六節まで、十五章廿六節、十六章十三節より十六節まで、十七章廿一、廿二節約翰第一書一章十三節、二章廿四節、三章廿三、廿四節、四章十二、十三節、羅馬書八章九、十、十一、十六節、哥林多前書三章十六節、六章十五節より十

信徒は基督の後嗣なり

九節まで加拉太書四章六節、腓立比書一章十九節、彼得前書一章十一節默示錄三章廿節）

此の如き融合の結果として信徒はキリストと略ぼ等しき狀態に入るに至る、キリストは榮光の王位を辭し、己を虛ふし、吾人と等しく卑賤の人性を受け吾儕の如くなれり、是れ自ら地上に下降して吾儕を己の許に擧げんが爲めなり、彼は及ぶ限り吾儕の犯せる罪の結果を其身に負ひ、全く吾儕を之より救ひ出して、及ぶ限り吾儕をして彼が所有と榮光とに與らしむ、吾儕はキリストと偕に後嗣たれば、皆な彼の生命と苦しみと榮光と歡樂とに與れり（羅馬書八章十六、十七節）我儕はキリストと偕に榮を嗣ぐべき者なり（約翰傳十七章二十二節）又彼と偕に歡樂と（約翰傳十五章十一節、十七章二、十三節、馬太傳廿五章廿一、廿二、廿三節）神の愛と（約翰傳十七章廿六節、羅馬書五章五節、以弗所書三章十七、十八、十

九節）、永生と（約翰傳十章廿八、廿九、三十節十七章二節）、永遠の室家（約翰傳十二章二十六節、十四章三、四節、十七章二十四節、帖撒羅尼迦前書四章十六節）とを嗣ぐべし、キリストは我儕の中に活動す（羅馬書六章三節より八節まで加拉太書二章二十節、以弗所書一章三節、二章六節、約翰第一書三章二十四節、四章十三節）、キリストは吾儕の靈的生命なり（約翰傳六章三十五節、五十一節より五十七節まで、十一章二十五節、十四章六節、十九節、哥羅西書三章一節より四節まで）、キリストは我儕の力なり（約翰傳十五章五節、哥林多後書十二章九節、腓立比書四章十三節）、是故に我儕はキリストの中に完ふせらる（約翰傳一章十六節、哥林多前書一章三十節、以弗所書一章六、七、八節、腓立比書三章九節、哥羅西書二章九、十節）、信徒とキリストとの融合は永遠なるべし（帖撒羅尼迦前書四章十七節、約翰傳十四章三、十六節十七章廿四節）、かくてキリストは完全充備の救主となれ

り、キリストは正しく神が吾人の犯罪に伴ひ來たる損害を償ひ、罪を掩ひて人心を感動し、以て人をして悅んで神に從ひ、忠節を竭すに至らしめん爲めに、能くすべき所を實現したる者なり、キリストは自ら好例を示して吾人を勸誘するに、己が十字架を負ひて彼に從ふべきを以てす、キリストは其靈に依りて吾人の衷に內住し、吾人の光、生命、力、嚮導者となり、吾人をして益々彼に類似せしむ、又彼は吾人の衷に働き、吾人を介して働き、吾人を變じて漸く彼と等しく類化するに至らしめ、以て吾人をして彼と永遠親交を保つに適せしむ（羅馬書八章二十九節、哥林多後書三章十七、十八節、哥羅西書三章十節、希伯來書十三章二十一節、彼得後書一章四節、約翰一書三章二節）

予は今實地神學の部門に入りて、聖靈が信徒の間に存在して完ふせらるゝ事業を觀察するに、基督敎會に於ける聖靈の位置と能力とは、從

來人々の看過せる所にして、極めて安價に評定せられたりと云はざるべからず、然りと雖ども第二十世紀は大に趣を異にし、聖靈の在す事と其力とを高調する點に於きては、第一世紀以後未だ曾て見ざりし程著しかるべきや疑なし、

キリストは聖靈を重んじたり、彼は聖靈に依りて萬事を遂行したり、然り彼の生るゝや聖靈に由れり、又彼の洗禮を受くるや限量なく聖靈を受けたり、彼れヨルダン河より歸るや聖靈に滿たされたり、彼は又聖靈に導かれて曠野に行きたり、ナザレに行ける時は、『主の靈我に在す、故に貧者に福音を宣傳へん事を我に膏を沃ぎて任じ云々……』と揚言せり、キリストは永遠の靈に由りて己を十字架上にて神に獻げたり（希伯來書九章十四節）彼は又聖靈に託りて其弟子に誡を與へたり、（使徒行傳一章二節）

使徒の事業は聖靈の祐導に賴ること頗る大なるを以て、使徒行傳は聖靈の言行錄とも稱すべし、實に聖靈は基督敎會を建設し、其事業を導き、又傳道者の心中に滿ち溢るゝばかりに內住せり、パウロとバルナバとは聖靈の撰びを受けて外國傳道の途に就けり、吾人は須らく此使徒時代に立ち還らざるべからず、

吾人聖書を通觀するに、神は人心に於ける働きを完ふするには皆な聖靈に依りて爲すを知る、或は人を奮勵し、或は之を導き、或は再生せしめ、或は聖ならしめ、或は眞理を人心に啓示し、人心を靈化する等、何れも聖靈の助に依らざるはなし、

聖靈に人格あり

聖靈は或意義より云へば、確かに人格を備へたる者なり、何となれば人格に必要なる屬性は、聖靈にも屬すと看做されたる所多ければなり、例せば悟性（哥林多前書二章十節、十一節）、意志（使徒行傳十五章廿八節、羅

聖靈は神なり

馬書八章廿七節、哥林多前書十二章十一節)、感情と感受性(以賽亞書六十三章十節、以弗所書四章三十節)等、皆な聖靈に屬すとせらる、隨て人格に特有なる行動は、皆な其能くする所なりと看做さる(約翰傳十六章十三節、羅馬書八章十四、十六、廿六節、哥林多前書十二章八節より十一節まで)、聖靈は人間の行動によりて或は快感を來し、或は苦感を生ず、(使徒行傳五章三節、馬太傳十二章三十一、三十二節)、聖靈を呼ぶに人代名詞を用ゐたり(約翰傳十四章十五節)、聖靈の人格は父及び子の人格と判然區別せられたり(約翰傳十四章十六、廿六節、馬太傳三章十六、十七節、哥林多前書十二章四、五、六節、彼得前書一章二節、默示錄一章四、五、六節)

嚴密に云へば聖靈は實に神なり、故に聖靈は神なりと稱せらる(使徒行傳五章三、四節、以賽亞書六十三章十節)、神的屬性は亦聖靈にも屬すとせらる、例せば全知、全能、遍在の如き皆な聖靈の屬性なりと見做さる、聖

靈は何れの處にても基督敎徒となれる者を新たにして其衷に住む者なり、永遠も彼の屬性なり（希伯來書九章十四節）、彼は神の爲すべき働きを爲し、心靈再生の事業を完ふす、（約翰傳三章五、六節約翰第一書五章四節、提多書三章五節）、聖靈は預言者と聖書記者とに默示を與へたり（提摩太後書三章十六節、彼得前書一章十一節、彼得後書一章二十一節）、彼は亦神と等しき榮譽を受く、（馬太傳二十八章十九節、哥林多後書十三章十四節）、彼は子よりも一層大なる榮譽を受くるの權あるが如し（馬可傳三章廿八、廿九節、馬太傳十二章三十一、三十二節）

是より人類救濟の爲めに、聖靈の完ふする事業を觀察するに當り、吾人は先づ再生の事を考へざるべからず、聖書は之を說かんが爲めに種種の表號を用ゐたり、例せば新たなる心或は靈と云ひ（詩篇五十一篇十節、以西結書十一章十九節、十八章三十一節、羅馬書六章四節、哥林多後書

五章十七節、加拉太書六章十五節)、靈より生れたりと云ひ、又神より生れたりと云ひ(約翰傳一章十三節、三章五、六、八節、雅各書一章十八節。彼得前書一章二十三節、約翰第一書二章廿九節、三章九節、四章七節、五章四節、十八節)、暗黑より光明に移れりと云ひ(使徒行傳二十六章十八節、以弗所書五章八節彼得前書二章九節)、死より生命に移れりと云ひ(約翰傳五章廿四節、羅馬書六章十三節、以弗所書二章一、五、六節、約翰第一書三章十四節)、サタンの國より神又はキリストの國に來れりと云ひ(使徒行傳二十六章十八節哥羅西書一章十三節)、舊人を脫して新人若くはキリストを看たりと云へり(以弗所書四章廿四節、哥羅西書三章九、十節、羅馬書十三章十四節、加拉太書三章廿七節)

再生は根本的變化あるを示す者なり、然りと雖ども其變化する所は品格にして、人間を組成する要素に非ず、敢て新たなる能力の加へらる

るに非ず、さりとて人間本有の能力を壓迫するにも非ず、然りと雖ども再生は單に熱心なりと云ふに非ず、亦單に改革（改造）せりとか、或は品格發達したりと云ふに非ずして、實に新品格生れ出でたりとの云ひなり、即ち人若し再生すれば欲望の趣く所ば變じて、心情始めて神と萬人の善とを愛し、又之を撰び之を樂み神と交はるに至る、此の如き變化は人類の靈魂が聖靈の指し示す所に從ひ、聖靈と共力するに依りて成就せらるゝなり、吾人が心內に神聖なる狀態の創始するも實に此時にありとす、而して事の起るや一瞬時間に於てす、然りと雖ども此に到るまでには多年の準備の存することあるは固より怪しむに足らず、

再生せる者と然らざる者との別

再生せざる人の狀態は既に罪を論ぜる時に述べたるが如く、神より離れて利己的狀態に陷り、心中毫も安心なきにあり、吾人は心情を一變して再生するに非ずんば、神と、靈的美と、靈的眞理と、靈的感化殊に聖靈

の感化とに對して、多少の差はあれ無感覺なるを常とす、然るに心魂再生するや萬人の心情ば一樣に、靈的美と、靈的眞理と、靈的感化殊に聖靈の感化とを看取して之を其身に容れ、衷情より神を愛し又神を撰擇するに至る、

されば再生とは品格、若くは心情の變化するを云ふ、即ち個人の道德的態度を變更するを以て、從て意志の向ふ所と撰擇の目的とを變せしむ、此の如く心情の變化する事、即ち再生の救に必須缺くべからざる事は聖書の示す所なり、

イエス答へて曰ひけるは誠に實に爾に告げん人若し新に生れずば神の國を見ること能はじ……イエス答へけるは誠に實に爾に告げん、人は水と靈とに由りて生れざれば神の國に入ること能はざるなり（約翰傳三章三、五節）

そは肉の事を念ふは神に乖るが故なり是れ神の律法に服はず又服ふこと能はざるに因る(羅馬書八章七節)

性來のまゝなる人は神の靈の情を受けず是れ彼には愚なる者と見ゆればなり又之を知ること能はず、蓋は靈の情は靈に由りて辨ふべき者なるが故なり(哥林多前書二章十四節)

此の如き變化は神力が聖靈によりて完ふする所なり、

イエス答へて曰ひけるは誠に實に爾に告げん人は水と靈とに由りて生れざれば神の國に入ること能はざるなり(約翰傳三章五節)

我を遣はしゝ父若し引かざれば人よく我に就るなし我に就りし人は末日に我之を甦らすべし(約翰傳六章四十四節)

紫布を售るテアテラの邑の商人にて神を敬ふルデヤと名くる婦ききゐたり主其心を啓きてパウロの語ることに心を用ゐしめ給ふ(使徒

行傳十六章十四節）
然れば我は種ゑアポロは灌ぐ、長つる者は惟神なり種る者、灌ぐ者も數ふるに足らず惟貴きは長つる所の神なり、それ種る者も灌ぐ者も異なることなし、各功力に循ひて其賞を得べし、我儕は神と同に働く者なり爾曹は神の田神の室なり（哥林多前書三章六、七、八、九節）、
彼れ己の旨に循ひ眞道を以て我儕を生めり、是れ我儕をして其造る所の物の中にて初に結べる果の如き者とならしめん爲めなり（雅各書一章十八節）
凡そイエスをキリストと信ずる者は神に由りて生れたる者なり、凡そ之を生む者を愛する者は亦其生るゝ所の者をも愛するなり…………
凡そ神に由りて生るゝ者は世に勝つ、我儕をして世に勝たしむる者は我儕が信なり（約翰第一書五章一、四節）、

希望は羞を來たらせざるを知る、こは我儕に賜ふ所の聖靈に由りて神の愛我儕の心に灌漑げばなり（羅馬書五章五節）

爾曹の中前には此の如き者ありしかども主イエスの名に賴り且つ我儕の神の靈に因りて洗滌ひ又潔まり又義と爲ることを得たり（哥林多前書六章十一節）

罪に死し時にすら我儕をキリストと偕に生かしたり爾曹恩に由りて救はれしなり（以弗所書二章五節）

彼れ我儕が行ひし所の義き功に由らず唯その矜恤に循ひ重生の洗ひと聖靈に由りて新たにする事とを以て我儕を救へり（提多書三章五節）、

再生の大業を完ふするに當り神の言は聖靈の劍となる（希伯來書四章十二節、雅各書一章十八節、彼得前書一章廿三節）聖靈は罪を譴責し又

人をして罪あるを自覺せしむ、加之人を勵まし、之を敎誨し說敎を助け、人をキリストに招きて神に對する愛心を興奮し、又此心なき者に之を與ふ、

聖靈の感化は尋常なりと云はんよりは寧ろ特殊なり、奇跡的なりと云はんよりは寧ろ超自然的なり、此感化には毫も心意上の法則を沮害するが如き事なし、吾人は此感化に抗すべからずと云はんよりは寧ろ抗せずと云ふを至當とす、吾人の心意は聖靈の働きを受くると同時に亦自ら活動す、悔改と信仰とは論理的に觀察すれば再生に後ると雖ども、時間的には前後の區別を立つべからず、而して悔改と信仰とあれば、赦罪と義とせられたりとの感之に隨伴すべし、

悔改と云へば其內には罪を認むる事、悔悟若くは罪を悲む情、危險の思ひ、罪と之に伴ふ危險とより脫せんとの願望、斷乎として犯罪を止む

べしとの決心等を含む者なり、然り實に最後の決心あるに非ざれば之を悔改とは云ふべからず、

信仰は既に云ひたるが如く、危險若くは窮迫の意を隱約す、信仰に二種あり、一は智的承認にして人物若くは事物に就きて其眞理なることを肯ふ事なり、未だ是れ人を救ふ所以の信仰に非ず、何となれば惡魔も然りと肯ふが故なり（雅各書二章十九節）、人を救ふべき信仰は此知的承認に加ふるに、信頼即ちキリストに一身を委ぬるてふ事を以てせざるべからず、されば此信仰は意志の働きなるや明なり、人を救ふに足る信仰は、新約聖書にはキリストの衷情に入りて之を信ず（believe in）と云ふか、若くはキリストの上に己が一身を委ぬ（believing on）とか云ふ語句を用ゐたり、即ち希臘語の εἰς 若くは ἐπὶ なる前置詞を目的名詞の前に用ゐたり、蓋し希臘語の πιστεύω なる者は單に知的承認と云ふ義に止まらず

自ら委任すとの意あり、されば往々此語を如上の如き意義に翻譯したり（約翰傳二章二十四節、路加傳十六章十一節、羅馬書三章二節、哥林多前書九章十七節、加拉太書二章七節、提摩太前書一章十一節、提多書一章三節）救はるべき信仰とは心を開きキリストを迎へて之を常住の客と爲すを云ふ（約翰傳十四章廿三節、默示錄三章二十節）此に由りて之を觀れば信仰の中には知識、承認、及び信賴等の伏在するを知るべし、ホレス、ブッシュネル云へる事あり『基督敎の信仰とは行動を遂行する上の信仰なり、是れ決して命題を眞理なりと承認するに非ずして實に己が一身を他人に委ねて之が爲めに休息し、安全に保護せられ、導かれ、陶冶せられ、支配せられて永遠に他に屬するの云ひなり、此信仰は汝に神を與へ、直接的實驗的知識に由りて神を汝が心に滿たしめ、又神の中に包容する萬物を悉く汝の有に歸せしめ、遂に汝に許すに神の品格を其身に具

備すべきを以てす』(ブッシュネル傳百九十二頁參照)

此變化を爲さしむるに與りて最も力あるものは聖靈なり、然りと雖ども吾人の心靈は常に心情を開きて聖靈を受け、信仰によりてキリストを迎ふるを以て、神は吾人の心內に永住するに至るが故に、吾人は聖靈の爲す所に合意し、之と協同の働を爲す者と云ふべし、普通の鋼鐵より成れる針は決して一定の方向に向はずと雖ども、既に磁氣を受容したる後には常に北極星に向ひて變ずることなし、人心も亦此の如し一旦悔改して未だ曾て有せざりし新衝動を受くるや、其心の向ふ所は常に神にあり、更に他の例を用ゐる時は新生(再生)は、猶ほ一遊星を在來の系統中より脫せしめて之を他の系統中に投入するが如し、斯の如き塲合には此遊星に對する、他體の引力大に昔時と異なるに至るべし、吾人の未だ悔改せざるや其中心とする所は自己にあり、然りと雖ども一旦

再生者は必ず神と人とを愛す

悔改する事あれば其後の中心は神にあり、

吾人は再生したる靈魂の主觀的狀態を述ぶれば、第一神と人と自己とに對して平和の滿つる事、又喜樂ありて現在と未來とに向て希望あること等最も著しき者なり、

再生したる心情働きて客觀的に現るゝ樣を述べんと欲せば、愛の一語以て之を盡す、即ち神を愛するを以て第一義となし、次に各自の道德的價値に比例して其他の者をも愛するを云ふ、而して此愛たるや自由にして己を忘れ、公平にして普遍的なり、此愛は意志の働きにより現はる、吾人が他を愛するは特に其人々を利己的に好むが故に非ずして、吾人は萬人を愛すればなり、此愛は又行爲に現はるゝ有力の者なり、即ち吾人は我が愛する者を及ぶ限り助けんことを欲す、愛は又罪に反す、即ち愛の精神は慈悲、恩惠、公義、正直、忍耐、温柔、謙遜、克己、撙節等の諸德に

再生せる者の心情と否らざる者の差異

發現す、

今再生したる心情と未だ再生せざる者とを比較せんに、此二者は偕に己が幸福と他の幸福とを冀ひ、己が災禍と他の災禍とを怖れ、概して眞理の勝たんことを欲し、正を讃し不正と罪とを譴め、善人の品格を見て之を樂しみ、公義の行はるゝを嘉みして之を樂しみ、眞理と眞實とを讃し、世俗の業務を爲すに當りて概して正直の行はれんことを冀ふ、是れ兩者の相一致する點なり、

然りと雖ども此二者の異なる所は、詮ずる所神に忠節を竭すと否との一點に歸す、甲は神に忠節にして乙は忠ならず、甲の心は多少博愛的なれども乙の心は多少利己的なり、甲は主として原理を基として行動し乙は衝動を基として行動す、甲の愛は爲めにする所なく乙の愛は爲めにする所多し、甲の愛は公平無私にして乙の愛は偏頗なり、甲の愛は

博くして世界を容れ乙の愛は狹くして他を排斥するの傾なり、未だ再生せざる心情の行動を、既に再生したる心情の行動に比較するに、兩者の目的とする所は大に異なれり、甲は自己若くは少數者の善の爲め、乙は凡ての人(神をも含めて云ふ)の善を目的として行動す、亦兩者の邪行を撿するに其間逕庭のあるを覺ゆ、甲にありては不正行爲は其常軌なるに、乙にありては是れ除外例たり、再生したる人罪を犯せば、彼之を惡み、之を嫌ひて悲哀の後、悔改して永遠に至るまでも犯罪を止めんと切願す、

再生にも危險の伴はざるに非ず、蓋し僞りの悔改なる者なきを保せざればなり、人は己の有罪なるを肯ひ、之を悲むと雖ども遂に罪を脱離せんとするの決心を爲さゞる事あるべし、(哥林多後書七章十節)、又世には僞りの信仰即ち智的信仰なるものありて、未だキリストと靈的融合

を爲さゞるを以て己が身をキリストに委ねざる者あり、

更に吾人は己が心內を省みて能く之を精査せば、眞正の悔改に著しく現はるゝ特徴は謙遜なるにあるを知るべし、之に反して僞りの悔改の特徴は靈的驕傲と自信力の過大なるとにあり、眞正の基督教徒は靈的眞理にて身を修養し、又神と交通せんことを欲す、之に反して僞りの基督教徒は思索と不必要なる眞理とを愛す、前者はキリストの召しと世界の要求とに應せんが爲めには如何なる者にも成り、何處にも行き、如何なる事にても敢て爲すの決心あれども、後者には此精神なし、甲は己の私を棄てゝキリストと衆人の爲めに企圖し又蓄財す、然るに乙は己が意に任せて事を爲さんと欲す、甲は自反自省して己が欠點を自覺し、更に一層成長發達して大に有用の士たらん事を冀ひて苦心するに、乙は己が靈的狀態に甘んじて反省するを好まず、甲は人をキリストの

許に導かんとて自ら勞力するを愛すれども乙は世俗一般の業務を好む、

吾人は基督教徒の不活潑にして虛弱なる原因を索ぬるに、其主因となる者は彼等が悔改の思未だ深く根ざゝず、其罪に對する感想に生氣なく、其信仰強からず、又心內の愛と喜樂と平和とは何れも深奧なる所なきにあり隨て有用の信徒たること難し、是れ實に棘の中に播かれたる種に等しき聽衆なり、(馬太傳十三章廿二節)今述べたる諸恩寵の薄弱にして不完全なるは之を然らしむる一原因あり、是れ他なし、聖靈の人心內に住むこと不完全なるにあり、聖靈は實に吾人の生命にして亦力なり、彼微りせば吾人は何をも爲すべからず、

彼また答へて我に言ひけるはゼルバベルにヱホバの告げ給ふ言は是の如し萬軍のヱホバのたまふ是は權勢に由らず能力に由らず我靈

に由るなり(撒加利亞書四章六節)

我は葡萄樹爾曹は其枝なり人若し我に居り、我亦彼に居らば多くの實を結ぶべし蓋若し爾曹我を離るゝ時は何事をも行し能はざればなり(約翰傳十五章五節)

我は我に力を與ふるキリストに因りて諸の事を爲し得るなり(腓立比書四章十三節)

吾人は毎朝心の戸を開き窓を排し、我靈魂の生命たる神的貴賓を迎へ、我心内の隅より隅まで殘る隈なく彼の充實するに至るを努めざるべからず、

豫定と豫知

抑も神の目的は萬般の事件に普ねく彌るを以て、人類の再生と悔改とにも及ぶや明なり、人或は問はん神は或人を特撰して永生に入らしむ、是れ彼等が悔改すると否とに論なく、神は之を特撰して永生に入ら

しむとの義なるやと、予を以て之を觀るに大に否らず、夫れ悔改と信仰とは共に神の經綸の中に在れば、神は悔改せざる者を救はざるなり、聖書には神親ら或人を特撰して之を永生に入らしむとの意を洩らしたる所少からず、例せば羅馬書八章二十八節より三十節まで、以弗所書一章四、五節彼得前書一章二節の如し、然りと雖ども聖書を幾何許り精讀するも、未だ曾て神が或人を特撰して之を永死に至らしむとの意を示す所あることなし、吾人は豫定と豫知とを區別せざるべからず、神は己れ親ら爲すか若くは他人の意志と己と協力するか二者其一を擇むて己が將來完ふせんとする事を豫定す、神の豫知は己の爲さんと欲する事のみならず、亦己の爲さゞらんと欲する事をも包含す、然り實に惡人が自己の自由意志を用ゐ、天祐を須たずして決行せんとするを神は斷じて助くる事無きことまでも、豫知の中に包含す、吾人は此二者を辨別

して一を能働的豫定と名け、他を所働的豫定と云はんと欲す、吾人が或は善を爲し或は惡を爲さんと決するや、神之を豫知するが故に然るに非ず、唯神は人の撰擇すべきを知るが故に之を豫知すと云ふのみ、神の豫知は人類の行動の表號とこそ稱すべけれ、斷じて其原因には非ず、

神が或人を特撰して之を永生に入らしめ、而して或人を斯の如く爲さゞる所以は實に神は特撰せられし者が神の導きに從ひ、神と協同して神の世界に對する仁慈ある經綸を完ふせんが爲めに、共に働く者なるを知ればなり、神のアブラハムを撰びたるは彼も云へるが如く、『其は我をして其後の兒孫と家族とに命じヱホバの道を守りて公義と公道を行はしめん爲めに彼を識れり是れヱホバアブラハムに其曾て彼に就て言ひし事を行はん爲めなり』(創世記十八章十九節)、神が或人を特撰して永生に入らしむるは他人の救はるゝを沮害するの意なし、神が或

神聖となること

人の悔改して救はるゝに至るを知る事實は決して他人の救を不可能ならしむる所以の原因とはならざるなり、此事實には毛頭此の如き不可能事なし、否な之に就きては確然たる事あり、何ぞや他なし即ち或人は自ら救はれんことを冀はざる事是なり、而して獨り神のみ確實に此事を知る、此確實なる事は左の二點によりて決定す、即ち第一、罪人は絶えず悔改せざるべしと固く決意する事、是れ最も樞要なる點なり、第二、神は罪人の決意を飜さんが爲めに成功する程有力なる感化を施すは思慮ある業に非ずと決心する事、

吾人の祈禱と之に對する應答も、神の豫知中に隱約せらると信ずる事を得べし、然る時は神は永遠の昔より、吾人が神意に循ひて捧げたる祈禱に應答せんとて、萬事を準備せりと看做さゞるべからず、

吾人は序を逐ふて漸く神聖となる者なりとは聖書の看做す所たり、

而して此の作用の基く所はキリストの贖罪にして、之れを遂行せしむる者は聖靈なりと表象す、而して各人の神聖の深淺は、心中に聖靈の內住と感化とが幾何許り充實し、又存續するかによりて之れを定むべし、吾人は現世に在る間は此の完全の域に到達すべからずとは斷ずべからずとは雖ども、何人にても自ら缺くる所なく神聖なる域に達したるを知ること頗る難し、誰か『近くことを得ざる光に在す』神の炯眼、豈に不完全なる一汚點又瑕瑾をだも發見し得ずと云はんや、然りと雖ども吾人は全くキリストを信賴することを得べし、是故に基督敎徒の或は完全なりと云ひ、或は神聖なりと云ふは、絕えず、キリストを以て己を贖ひたる活ける救主として今も尙ほ常住し給ふと信じ、聖靈を以て己が靈魂內に住みて之を聖ならしめ、之を導く力として信賴するにありと云ふも不可なし、實に活けるキリストが吾儕と偕に住まるゝは吾儕の特

權にして、此事實あるが故に吾人は幾分なりとも漂泊することあるか、或は罪を犯すことある時には、吾人は直ちに我を待てる活けるキリストに歸りて其赦を請ひ、茲に平和と喜悦とを完ふし、己が曾てキリストに叛きて彼より離れたる事を全く忘るゝを得べし、

予一個の經驗に徴するに、基督教的生涯の進歩を遂げんと欲せば、左の數件を守るを緊要とす、

(第一)先づ吾人が信仰の基礎となる者を精査し、基督教の根本的眞理に就ける疑團を解くべし、例せば人類を愛する活ける人格的天父、神言としての聖書、キリストの神性、キリストの贖罪、聖靈の人格と事業等に就ける疑問を解決すべし、

(第二)キリストに對する信仰は單に智的若くは情的なりと云ふに止まらず、彼は吾人の救主、贖主、又常に活ける仲保者として吾人の信賴する

に値ひする活ける常住不變の緊要なる主なることを確むべし、

(第三)神言を讀み、之を研究し、以て自ら修養すべし、

(第四)多く祈禱すべし、

(第五)神と神に就ける事とを沈思默想すべし、

(第六)衆人をキリストに導かんが爲めに、親ら神に祈禱し又勞を厭ふこと勿れ、

(第七)萬般の事に於て神に從ひ、神と協力せんことを努むべし、

(第八)キリストが約翰傳十四章十五節より廿三節に至るまでに於て約束し給へる所の能く我身に成就せんことを努むべし、

基督教會の特徴

予はキリストは此世に其教會を建設したりと信ず、又眞正なる基督教會の特徴は左の數點に存すべしと信ず、

(第一)キリストを教會の首長と承認すること、蓋し教會はキリストの

神性てふ磐石の上に安立する者なり、

（第二）キリストと彼の十字架に釘けられし事を宣傳する事、

（第三）キリストの命に基き洗禮と主の晩餐式とを守る事、

（第四）キリストと人類救濟とに全力を捧げて熱心に働く事と、忠實なる男女の會員中に活ける宗敎の存する事、

キリストは敎會の首なり、使徒等は彼を頭に譬ふるを常とす、又同意義を表はせる表號其數に乏しからず、例せばキリストは新郎にして敎會は新婦なりと云ひ、又キリストは基礎にして敎會は建築物なりと云ひ、キリストは葡萄樹にして敎會は其枝なりと云ひ、キリストは牧者にして敎會は羊なりと云へるが如し、

キリストは洗禮と主の晩餐の二大禮典を確立し給へり、又敎會の憲法と其敎職とを制定せり、

イエス彼等を召びて曰ひけるは、異邦人の君と見ゆる者は其民を治め、また大なる者どもは彼等の上に權を執る、是れ爾曹が知る所なり、然れど爾曹の中にては然すべからず、爾曹の中大ならんと欲ふ者は爾曹に役はるゝ者とならん、また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は凡ての人の僕とならん、蓋は人の子の來るも人を役ふ爲めに非ず反て人に役はれ且た、おほくの人に代はり其命を予へて贖とならん爲めなり(馬可傳十章自四十二至四十五)

爾曹はラビの稱を受くること勿れ蓋は爾曹の師は一人即ちキリストなり爾曹は皆な兄弟なり(馬太傳二十三章八節)

爾曹我を師と呼ぶ亦主と呼ぶ爾曹の云ふ所は宜し我は誠に是なり、我は爾曹の師また主なるに尚ほ爾曹の足を濯ふ、爾曹も亦互に足を濯ふべし、(約翰傳十三章十三、十四節)

故に爾曹自ら愼み且つ爾曹が聖靈に立てられて監督となれる其全群を愼み主の己が血をもて買ひ給ひし所の敎會を牧ふべし、(使徒行傳廿章廿八節)

然れど神の各人に頒ち予ふる所また主の各人を召す所に循ひて此の如く行ふべし、我凡ての敎會に定めたるも此の如し、(哥林多前書七章十七節)

神は第一に使徒第二に預言者、第三に敎師、其次に異能を行ふ者、次に病を醫す能を受けし者、救濟する者、治理者、方言をいふ者を敎會に置き給へり(哥林多前書十二章廿八節)

其賜ひし所は使徒あり預言者あり傳道者あり牧師あり敎師あり是れ聖徒を全ふし服從の事を行ひキリストの體の德を建て我儕をして皆な同じく神の子を信じ之を知り全人即ちキリストの滿ち足るほど

基督と教會の生命

と成るまでに至らん爲めなり（以弗所書四章十一、二、三節）キリストは常に基督教會に住める活力なり、吾人に生命あるは實に吾人は葡萄樹なるキリストの枝にして、彼と融合して活けるに因る（約翰傳十五章自四節至八節）、吾人は絶えずキリストの肉と血とを以て身を養ふに非ずむば吾人に生命なし（約翰傳六章自五十三節至五十八節）、故にキリストの聖靈を介して基督教徒の中に住み、以て其生命ともなり又力ともなるあらば、是れ實に眞正なる基督教會會員たるの証左なりと觀るべし、キリストは常に其教會內に忠實なる牧師と、餘他の事業家とを興起せしむ、

教會の目的

教會の生命と事業とは、亦キリストの者たり、さればポウロが初代教會を迫害せるは正しくキリストを迫害せるなり（使徒行傳九章四、五節）、キリストは自ら己を信奉する者の中に內住すと云へり、即はち最微な

る一信徒に水一杯にても與へたる者は、之れキリストに與へたると等しと云はれたり、教會の目的はキリスト自ら約翰傳十七章十八節と二十章二十一節とに云へる『父の我を遣はしゝ如く我も爾等を遣はさん』てふ語によりて之れを察すべし、又キリストは喪ひし者を尋ねて救はんために來れり(路可傳十九章十節)、馬可傳十六章十五節に載せたる『偏く世界を廻りて凡ての人に福音を宣傳へよ』と云ふ最後の命令も亦教會の大目的を能く言ひ顯はせる者と云ふべし、會員相互の建徳も亦教會の大目的にして、信徒の基督教的生涯の成長せん事も、亦教會の目的なるに於て前者と擇ぶ所なし、

　教會内に於ける教職中の一を述ぶるに當りて、或は監督と云ひ、或は長老と呼び、或は牧師と稱し、或は教師と云へり、何れも皆な同一職を指せるなり、執事と云へるは之と全く異なれる者なり、

洗禮は弟子となれる事を外に現はす記號にして、聖靈によりて心新たになれるを示す表號なり、

主の晩餐はキリスト我儕の爲めに死し給へるを紀念する者にして、逾越節は其が古代に於ける表象なり、吾人は此大典を守りてキリストと根本より融合し、又交通してキリストの死より出で來る福祉を己が身に適用すべし、是れ即ち信仰によりてキリストより滋養分を得、以て靈的力を受くるの云ひなり、

基督敎は家庭を以て社會及び國家の基礎と爲す、然り家庭は學校と國家と敎會との基礎を爲る者なり、敎會は社會と國家との改善に關係ある事柄には充分に活動的興味を有するを示すべきなり、

敎會員がキリストと融合するは實に敎會を活動せしむる所以なり、抑も敎會員たる者は皆なキリストと人とに對して負へる責任の重大

なることを感じ、縱ひキリストと同一方法によりて萬事を爲さずとするも恰もキリストの如く己を人の爲めに獻ずべきなり、然り吾人は實にキリストの感じたるが如く、人の價値と其危險とを覺え吾人が人類の爲めに働らく時はキリストも我儕と偕なる事を忘るべからず、

敎會の組織機關完からざれば之を運轉せしむべからず、されば敎會は其規摸如何に小なるにせよ、必ず其內に小團隊、若くは組分あるを要す、而して組長若くは團體長なる者は敎會の事業に關して屢々牧師と會合せざるべからず、是故に敎會員全部を擧げて共勵會員と爲し、次で其誓約をして日常の生涯と業務とを支配する規則たらしむるを得ば、冀くは敎會にして其誓約を實行し其事業を活動せしむるに庶幾し、

安息日學校は敎會に附屬せる最も重要の機關にして、其大目的は生徒を導きてキリストを救主として受けしめ、以て强健にして活動的な

る靈的基督敎徒を養成するにあり、

敎會に於ける社交的生活は、會員をして眞に親しましめんことを期すべし、

敎會の事務は小心翼々として之を運び決して負債を生ぜしむべからず、負債は敎會に取りて一の妖怪なり、

祈禱會

祈禱會は敎會に於ける最も重要なる會の一なれば、祈禱の題目は會を開くに先ち之を定むるを可とす、此の如くせば此會に來るものをして熱心ならしむるに與りて力あるべし、司會者は須らく凡ての來會者に何かを得しむる樣心掛くべし、

牧師の職

牧師の職は人間として務むべき職業中、最も緊要の位置なり、牧師は直接人を救ひ、品格を建設せんと努む、是れ實に人間として能くすべき最も貴重なる事業なり、人誰れか品格建設に優りて一層重要なる事業

を國家の爲めに竭くし得る者ぞ、牧師たる者は宜しく敎會員全部を擧げて己が助手と爲し以て事を經營すべし、

說教

キリストと彼の十字架に釘られたる事とは說敎の大題目なり、說敎者たるもの宜しく每回聽衆をして決心をなさしめ、以て深く基督敎を研究し、又キリストを己が救主として受くるに至らんことを約束せしむるを得策とす、

安息日

安息日は靈魂の發達と、靈的事業とを完ふせんが爲めには必要なれば能く之を嚴守し靈的事業と發達との爲めに之を用ゆべし、

來世に就きて予の信ずる所を述ぶれば下の如し、人死すれば直ちに意識的狀態を脫するに非ず、而して彼が禍福は全く其の現世に於ける事業と自らの品格とに準じて定まる者とす、是れ啻に理性に符合する而已ならず、亦能く聖書の告げ示す所、殊にキリストの敎訓に符合す、死

後と雖ども心內の狀態は概して異なる事なしと雖ども、外部の狀態と境遇とは大に異なる者あるべし、

死後の審判

死後人類全般に亘る審判あるべし、此の審判により現世に於ける生涯と事業との結果は判明に各々に啓示せらるべし、而して此時より各人の品格確定して或は善人となり、或は惡人となり、容易に變せざるに至るべし、是れ實にキリストの明瞭に告ぐる所にして、現世に於きても品格は漸を逐ふて固定する傾きあるを見ても知るべし、予は人類悉く幸福となり結局神に忠節を竭すに歸着すべしと信せんと欲すれども、之を維持すべき理由の足らざるを如何せん、

絶滅説の不成立

然りと雖ども予は固陋にして悔改せざる惡人と雖ども、終に絶滅せらるべしと信ずべき根據なきを觀る、聖書に載せたる語にして往々絶滅、若しくは無に歸すとの意義を含めりと看做されたる者ありと雖ど

も、能く之を精査せば其の然らざるを知る、例せば路加傳五章卅七節には舊き革袋の壞れたるを述ぶるに ἀπόλλυμι なる語を用ゐたり、又馬太傳十八章十一節には羊の迷ひたるを描くに當り、同語を用ゐたり、又路加傳十五章九節には貨幣の紛失したるを述ぶる時も、路加傳十五章二十四節に於て放蕩なる子の行衛詳ならざる事を述べたるにも、同一の語を用ゐたり、之れを要するに原來造られたる目的を達せずして之に外づれたる時は之を稱して:ἀπολωλώς（亡びたる者）と云ふ、聖書には何處にも死を以て絶滅なるが如く記述せる處無し、靈魂の死は神より遠かるの謂にして、是れ聖書の通說なりと云ふべし、（約翰傳五章二十四節、以弗所書二章一、五節、提摩太前書五章十六節、約翰第一書三章十四節）是故に聖書に所謂生命とは單に存在するの謂にあらず、靈的生命は意識的に神と融合して存在するの謂にして、神と一致し神と親交を結び、樂しく

死後悔改の有無

且つ幸福なる生涯を送るを謂ふ、

死後に至りて罪人悔改すべしとは、望み難き事なりとは雖ども、在世中曾て一回もキリストの事を耳にせざるも、誠實に光を求め己が罪より脱せんことを冀ひ、死に至るまで此の如き態度を取りて世を去りたる人にありては、榮光あるキリスト來りて彼の眼前に現はるゝに際しては、『是れ予が多年求めたる所なり』と感じ、直ちにキリストの前に跪きて之を己が救主として受くべきや毫も疑を容れず、然りと雖も反覆罪を犯して其心頑として動かず、其の品格固定したる後死して他界に遷りたる者の悔改むべしとは容易に信じ難き所なりとす、若し來世に悔改なる者ありとせば之を爲す者は未だ品格の固定せざる者なるべし、若し靈界の眞理、幻象の如く眼前に輝く時に當りて、キリストを容れむとするの心掛になり得ざる人は、來世に至りてキリストを歡待せんと

の決心をなすことあらざるべし、若し人己が靈眼啓かれて榮光ある神を目撃し得るも、尙ほ神に叛きて神に遠ざからんとするあらば、來世に至るも決して悔改して神に復歸することなかるべし、此點に就きては理性も實驗も共にキリストの明白に敎へたる所と其揆を一にす、されば予は『今こそ其時』にして『今日は救の日』なりと信ぜざるを得ず、

刑罰は概して自然の結果と云ふべし、是れ實に止むを得ざるに出づ、神と雖ども己に遠かり、正義に反抗する者に對しては、如何に之を處分すべきぞ、其非行に伴ふ自然の結果たる、心内の大戰爭に伴ひて生ずる苦難を嘗めしむるの外なかるべし、シエクスピーアは曾て殺人罪を犯せる人に、左の如く云はしめたり『我に千枚の舌あり千舌皆な異なる物語を齎さゞるはなし、凡ての物語擧りて我を惡人なりと譴む』と、偶々以て心内の爭鬪を描くに足る、

靈體

予は靈體あるを信ず、此の靈體と地上の體とは果して如何なる關係を有すべきや、予の知らざる所なり、然りと雖ども眞正の自我なる靈魂が地上の肉體の構成的原理なるが如く、亦靈體の原理なり、此の如く同一の靈魂は二體の內に其光輝を放つべきに因り、此二體は互に類似する所あるを推知すべし、是れ實に吾人が天國にて友人を認識し得べき根據となる者なりと云ふべし、

天國

予は天國とは一定の塲所を指す者と解す、此天國は果して何處に在るや予の知らざる所なり、キリスト曰はく『我父の家には第宅多し』と、天國には神の玉座は云ひ現はすべからざる榮光の中に赫き、天使と智者とは之れに侍べり、此世にて救はれたる者も之に伺候すべし、天國は高尙なる智的活動と進歩との盛なる所にて、神と交はり善福を樂むの地なり、然り天國は實に完全の地なり、人若し天に就ける靈體を備へて國

を成すに至らば、視覺、音覺運動等自由にして其の神妙高絶なる、到底吾人の思ひ及び能はざるや明なり、而して其時に至らば縱ひ吾人は親ら神の全宇宙を目擊することなしとするも、吾人が之れを研究するの途全く開放せらるべし、天國には第宅多し、されど罪と疾病と死とは全く跡を收むべし、加之天國は他人の爲めに激甚なる道德的行爲を爲すべき地なりと觀るべし、曾て地上に住める頃は未だ品格も固定せざりし小兒も、成人の身となりて此處に住み、吾人の知らざる道德的受造者も此大宇宙に生息すと思へば、地上にありて敎育せられたる人々の國に達する曉には、道德的行動を施すべき機會如何にも大ならずや、

天使の軍勢實在すとは聖書も明白に之を啓示し、キリストも的確に之を敎へたり、天使の創造せられたるは人類の爲めなり、彼等は神聖にして其間種々の等級あり、彼等は神と偕に天に住み神に從ひて神を輔

佐す、殊に救を嗣げる者の爲めに働く者とす、彼等は救主の地上に降臨したる時と、彼が此地上に生息せる時とには、重要の使命を帶びたり、彼等はキリストの世を審判せんが爲めに再臨せらるゝ時彼に奉事する者とす、

惡魔

墮落したる天使、即ち惡靈の存在する事は、神の啓示する所にして、殊にキリストの告げたる所なり、彼等は神を知りて之れを恐る、彼等はキリストの弟子に先ち既にキリストを神の子なりと認めたり、彼等は一意專心惡を爲さんと欲し、人心を動かし之れを惡に誘はんとすれども、彼等の行動や多少の制限を受く、蓋しキリストは充分に勝を制したればなり、後日キリストは彼等を審判し、永遠に其惡を爲さんとする力を絶滅せしむべき境遇と狀態とに入らしむべし、

基督の再臨

此の世の終りに當りて、世界の審判執行せらるゝに際し、キリストは

再臨の意義

再び地上に來るべし、固より新約聖書には世の終りに先だち、キリスト再臨せらるべしとの意を帶ぶるが如き文辭なきに非ずと雖ども、聖書中には之と同時に亦彼の再臨するは世の終りに於てすと明言せる所あるも事實なり、故に之を棄てゝ顧みず、彼の意義判明を缺くの嫌ある文句を解して、直ちにキリストの來るは千年期前にありと斷ずるは、稍穩當を缺く者なりと云はざるべからず、今やキリスト此世を去りて殆んど二千年に垂んとす、而して彼が未だ再臨せざるを見れば、是れ明かに目下の問題となれる文辭を字義通りに註釋すべからざるを示す者に非ずや、

此問題を以下の如く解せば能く啓示と符合すべしと思はる、キリストは舊約時代數千歲に亘りて屢々己を現はし以て人類に神を啓示し、又己が奏すべき贖罪の大業と其表號とを啓示せり、彼が舊約時代に斯

くの如く屢々現はれたるは、皆な今を去ること千九百年の昔に於きて、キリストの降臨せられたるを表號的に示したる者なりと云ふべし、キリストの再臨も亦此の如し、彼が肉體にて現はれたる第一降臨に次で屢々降臨すべし、而して此等の小降臨は悉く彼が世の終りに臨みて、其王國を完成せんが爲めに、萬民を審判せんとて最後に降臨すべき大事件を表號的に示す者と看るべし、キリスト福音の王國を確立せんが爲めに曾て此世に降臨せり(馬太傳十章二十三節)、而して此の降臨たるやキリストと偕に在りたる者の死せざるうちに起りたりしなり(馬太傳十六章二十八節、馬可傳九章一節、路加傳九章廿七節)、ダニエルも此王國の確立せらるべきを豫告したりき(但仁理書二章四十四節、八章十三、十四節)、此王國はキリストの昇天すると同時に確立せられて一國と成れり、彼の五旬節に當りて聖靈の大降臨ありたる中に、キリスト親ら再臨

せられたるは即ち王國の現に確立したるを示す記號に外ならず（彼得後書一章十一節、默示錄十一章十五節、以弗所書一章自二十節至廿三節、腓立比書二章自六節至十一節、哥羅西書一章十三節、哥林多前書十五章廿四節、以弗所書五章五節）

キリストは時の古今を問はず國の文野を論ぜず、エルサレム滅亡の如き特殊の大悲劇中に自ら降臨して之を審判せりと云ふべし、而して吾人は此の如き事件を以てキリストが再び世の終りに當りて自ら降臨すべきを示す表號と看做すべし（馬太傳廿四章を看よ）、又彼は羅馬、佛國、合衆國にありたる如き歷史上の大事件中に降りて之を審判せり、然り彼は個人の中にも降臨すること少からず、殊に聖靈の大降臨ありて信徒と偕に住むに至れる時の如きは、キリストも降臨せりと云はざるべからず、又一個の信徒に就て之を云はゞ、其死に際しキリストは降臨

せらるゝ者なり、死てふ事件は實に基督教徒に取りては第二の降臨なるが如し、此機に乘じてキリストは信徒に臨みて之を己に納くべし（約翰傳十四章三節）

路加傳十二章三十五節より四十節まで、馬太傳廿五章一節より十三章まで、默示錄廿二章十二節等は個人の死するやキリストの降臨する意を洩らしたる者とも觀るべし、吾人はキリスト世を去りて此に二千年に垂んとするに、未だ其身再臨したる事無きを知れるを以て、以上の文辭を解するに當りてキリストが個人の死と同時に其人々に臨むと看做すこと微りせば、到底此文辭の眞意のある所を揣摩すべからざるなり、又キリストは世の終りに當りて之を審判せんが爲めに親臨せらるべし、此大降臨はキリストの昇天より世の終りに至るまでに、生起せる幾多の小降臨の完結せる者なりと云ふべし、

著者の基督教に對する確信

予は此書を卒へんとするに當りて斷言せんとす、基督教の根本的大事實は眞理にして疑ふべき者に非ずとの確信は、予の生ける間年を逐ふて其意義一層深玄に又堅固となれり、予は四十年間此等の問題に關する凡ての事實を恐るゝ所も忌み憚る所もなく科學的に研究せり、而して其眞理なることを信ずるはその能く理性に適ふことを知れるに因る、予が心中に疑の生じ來れる時は、何をも憚る所なく能く事物の眞相を奥底まで精査し、終に疑惑自ら解け信仰全きを得るに至れり、殊に聖書の質直にして意義一貫する點に就きては、予が確信愈々堅固なるに至れり、此書の起原に僞作捏造なく、批評的研究の進むと共に其が根本的に眞實にして信憑するに値ひする者なる事を明かにせり、況んや聖書の内部に伏在する實質は、實に予が心情を飽き足らしめ、予が肺腑に徹底して、其說く所の理能く予に適合し、情意剴切予が衷心の要求を全

ふせしむる者あるに於てをや、是れ實に聖書の眞理なるを示す最强の證明に非ずや、予が之に對する信念は愈々强く益々固ければ、予が意を表はさんが爲めには、予は『之を信ず』と云ふ語の稍々足らさるを感ぜざるに非ず、予は寧ろ『之を知る』と云はんと欲す、

予が信仰の理由　終

明治三十七年十月　八日印刷
明治三十七年十月十一日發行

不許複製

定價金三十錢

著者　デビス

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

橫濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　警醒社書店

橫濱市山下町八十一番地
印刷所　福音印刷合資會社

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS
URBANA

博士デビス先生著書目次

○神學の大原理	定價金一圓	郵稅金二十錢
○新島襄先生傳	定價金一圓	小包料金十五錢
○（英文）基督教の基本	定價金五十錢	郵稅金六錢
○（組織神學）來世論	定價金十五錢	郵稅金六錢
○The what and the why of my faith.	定價金十五錢	郵稅金二錢
○古代教會史	定價金十錢	郵稅金六錢
○自然神學	定價金八錢	郵稅金二錢
○贖罪論	定價金四錢	郵稅金二錢
○造化新論	定價金三錢	郵稅金二錢
○神の性格	定價金二錢	郵稅金二錢
○基督の大なる約束	定價金二錢	郵稅金二錢
○德育に就て	定價金二錢	郵稅金二錢
○品格の建設	定價金二錢	郵稅金二錢

230
D29wj

230
D29wj